真剣で私に願いなさい - 八百万の想い -

六道真輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私に願いなさい - 八百万の想い -

【Ｎコード】
Ｎ６２４９Ｙ

【作者名】
六道真輝

【あらすじ】
たくさんの兄弟姉妹と父と山で暮らしていた少年はある日全て失った。
火の記憶。死の気配。
１０７の骸の丘に誰かが立っている。
それから数年後。
死んだと思われた彼は川神市にやってきた。
彼女――川神百代に会う為に。
彼の名は天憧百八。

曰く付きの名を持つ、百代に似た名の白い少年。

――あ、別にシリアスではないのだよ。

人物紹介（前書き）

趣味と特技を追加～

人物紹介

天憧百八（てんどうももや）

身長――――――１７５センチ
血液型――――――Ｏ型
誕生日――――――１０月８日
一人称――――――僕
武器――――――肉体
職業――――――学生・川神学院２－Ｓ
所在――――――川神院の近くにある安物マンション
好きな食べ物―たくさん
好きな食べ物―特になし
趣味――――――折り紙
特技――――――トランスフォーマーもビックリな折り紙テクニック
大切なもの――自分・百代
苦手なもの――自分・百代
尊敬する人――今は亡き１０７人の兄弟姉妹

髪は脱色してしまったので白。元は黒。
武芸百般を修めた人。
勿論武芸だけでなく、家事においてもあらゆる点でこなせる。
その能力を誇る事も奢る事もなく、総じて人当たりが良い人物。
が、すぐ騙される。
性格は小雪に近く、のほほんとしていて来る者拒まず、去る者追わずがスタンス。
どんな理不尽も笑って流して受け入れられる。
人生に対して夢も目標も？現状は？ない。
唯一つだけあるが、それは夢や目標というよりも彼自身の胸に秘

めた誓いのようなもの。
百代に対して並々ならぬ関心を抱いているが、それはかつての恋心とは少し違うらしい。

天憧十樹（てんどうとうじゅ）

かつて最も鉄心が信用した高弟にして、後の日本の聖人。非業の死を遂げた人物。
その観察眼から天眼と呼ばれ、九鬼家現当主である九鬼帝に頼まれて多くの人材を掘り出した経験も少なからずあった。上下関係はもちろんあったが、本人達にとっては友人のような関係だったらしい。
九鬼を止めたければ天眼を止めろと言われた程で、彼の九鬼での発言力は相当なものだった。彼の死に多くの者が嘆いたが、同時に安堵した者も多いという。
往年４３歳。

人物紹介（後書き）

まぁ、何がいいたいのかと言うと。
マジこいＳに対するフラグですよ、旦那。

0・・・天道（前書き）

少しだけ変えた。既読なら読む必要はあんまりないです。

0・・・天道

かつて。

川神院には三人の師範代候補がいた。

一人はルー・イー。

後に師範代となる武の正道を重んじる努力家にして凡夫の頂き。

川神院を正しく体現する一つの理想形。

一人は釈迦堂形部（しゃかどうぎょうぶ）。

三人の中でも最も強く、また獣のような男。

後に師範代へと登るが、精神が未熟とされ川神院から破門された武術家にして野獣。

そして。

最後の一人。

天憧十樹（てんどうとうじゅ）。

ルーのような努力家でもなく、また釈迦堂のような天性の武人でもないこの男は、誰よりも人を見る目に長けていた。

一目でその者に才能があるか否かを見極め、果てはその先の展望さえ見通せるほどの観察眼は一種の未来視、天眼とまで言われた奇才。

また三人の中で最も長く川神院で励み、長たる鉄心を支え続けた重鎮といえるべき人物。

しかし彼は川神院始まって以来の神童、川神百代の誕生と共に川神院を去った。

多くの人物に何故と問われても、決して答えず、惜しまれながら見送られた。

以降、彼は世界中を旅しながら戦災孤児や浮浪児を引き取り続け、日本の山奥で暮らしながら子供達を育て始めた。

その数、なんと百八。

冗談としか思えないその数は、けれど彼の莫大の財力によって克服された。

だが問題はなぜそれほどの子供を引き取り育てるのか？

訪れた鉄心に問われ、彼は嬉しそうに、けれどこそばゆそうにこう返した。

？これが私の天道なのです。切磋琢磨して成長する子供を見ているのが、私の楽しみなのです？

鉄心は彼の言葉に喜び、ルーもまた彼の言葉と意志を讃えた。

ただ釈迦堂のみが、それに喜ぶ事も讃えることもなかった。

何も言わず、ただ薄気味悪いモノを見るような目で談笑し合う三人を――正確には天憧十樹を見ていた。

そして六年後。

天憧十樹と、彼が救い育てた子供達は山火事で、あっけなくこの世を去った。

一人の男の子を残して。

生き残った子供の名は、天憧百八（てんどうももや）。

まるで悪い皮肉のような名を持つ少年は、日本の聖人とまで言われた天憧十樹の実子である。

あの事故から更に数年後。

彼の少年が川神学園に転入する事で物語は動き出す。

一人の男の狂った願いに歪められて。

0・・・天道（後書き）

ノリで書いているから文体崩れてるかも。
感想なんでもいいからちょうだい、っと。

1・・・挨拶

「ここが川神院かぁ」

手には綺麗に梱包された白い包みを持つ少年が、巨大な寺院の前に立っていた。

この寺院の名は川神院。

世界最高峰の武の鍛錬場で、恐らく日本最大規模の武術館には、今日も今日とて人が多く出入りする。

門の前に立っている少年は色んな意味で目立っていた。十中八九、誰もが同じ感想を抱くだろう。

白い。

真っ白だ。

腰まで伸ばした髪は脱色したかのように白。それ故に一見では年齢不詳だが、顔をよく見ればまだ十代後半の若者だと分かる。

そして顔をよく見ればまた驚くだろう。白磁のように白い肌に左目には白い眼帯が巻かれている。

更に格好も中々奇抜だ。

身に着る衣服もまた白の流し着に白い帯。

白い絵の具で描いたような人物像は、景観華やかな周囲にはまるで穴が開いたようにも映るだろう。

当然、そんな姿が門の前で止まっていれば――

「君、何か用かな？」

川神院の境内から道着を着た男が声を掛けて来るのも当然だろう。

大方出入りしていた者から変な白いのがいる、とでも言われて来

たのか。少年を呼びつけた男も、その姿を見て至極納得した。
ああ、確かに白いなこの子、と。
しかし声を掛けた男に、白い少年は反応しない。巨大な門を仰いで突っ立っている。
首、疲れないのだろうか。

「……おい？」

男が再度声をかけるが、反応なし。三度四度と声を掛けても全く反応がないので、とんとんと肩を叩くとようやく反応を見せて、

「あ、はい。そうですね。今晩は焼き魚がいいと思います」

たどたどしく、抑制のない口調。まるで喋る事に慣れていない様子で、全く関連性などないことを口にした。

「いや別に夕飯の話はしていないのだが……川神院に何か用かい？」
「――――？」
「……どうした？」
「――……ああ、貴方は、川神院の人……なんですか？」
「そう名乗ったし、見ての通りなんだが」

確かに男が着ている道着には大きな黒字で『川神』と縫われている。
少年は「本当だ」と呟き、ついでにこりと笑った。
人好きのする、ほがらかな笑みだ。
「天憧百八（てんどうももや）が来ましたと、鉄心の爺様に伝えてもらえますか？」

「茶がうまいのぉ～」
縁側に腰を落ち着け、快晴の空を見上げながら茶を飲む。
うむ、旨い。
これで孫達が仲良くしておれば最高じゃな。
一子はいつまで経ってもめんこい孫じゃが、最近のモモはのぉ……。
モモは飢えておる。強者に。今はワシがおるから問題ないじゃろうが、流石にもう何十年と生きとりゃせんじゃろう。
その時にはモモも、今以上の武人になっておる事は間違いない。
ふとそんな重い考えをしている事に気付き、苦笑した。

「せっかくの休みに、ワシはまた面倒事を……」

歳かの。
あの飢えを、武ではなく別の方向で発散させる事は出来ぬじゃろうか……
例えば？

「……恋とか、の」

……。

「爺のワシがなに言っちゃてんじゃかな」

少し鳥肌立ったわい。
しかし恋か。
恋をすれば人は変わるとは真実じゃ。

じゃからモモも、恋をすればあの飢えもあるいは……。

「その相手がのぉ、おらんのじゃからなぁ……」

だから女漁りなどに興じおる。

「誰か良い男はおらんかのぉ」

最有力候補といえば、あの風間ファミリーの連中くらいじゃが。

後は……

あやつの子が、生きておれば……あるいは……

「……いかんの、どんどん重くなっていきよるわ」

バリバリ。

醤油せんべいを食べ、熱い茶をすする。いつもはこの時が至福の時間なのじゃが、どうも考えておること故か、旨くないわい。久しぶりに初心に帰って座禅でも組むか。

「む、ルーか？　随分と急ぎ足じゃな」

こちらに近づいて来る気配を感じ、襖の方を見やる。同時にルーが「学園長！」とやけに切羽詰まった声を上げて入ってきたから驚きじゃわい。

「どうしたルーよ。血相抱えて」

珍しい、ルーがこれほど焦る事など久しく見ておらんな。

茶でも飲むかと茶碗を渡そうとして、

「百八が、天憧百八が来ましタ！」

パリンと。
茶碗を落としてしまった。
なに？
天憧百八？
来た？

……。

「――……！？　なんじゃとッ！？」

そのたった一言に、ワシは思わず立ち上がった。割れた茶など知ったことではない。
さっきまで考えていた事も、軒並み彼方へ消えて行ってしまった。

まさか、本当に？
どうして、何故いまさら？
嘘ではないのか？
聞き間違いでは？

「今、門の前に来ていルと、門下生から」
「通せ！　今すぐに！」
「はイ！」

打てば響くようにルーは踵を返していった。
ワシは暫しその背を追い、ペタンと腰を落としてしまった。
まさか、本当に？
あやつの、子が……？

「生きて、おったのか……」

白い少年――天童百八は境内に入る許可を得て、案内役の人に腕を引かれて院内を歩いていた。腕を引かれているのは途中――というか何度も稽古をする人を見かけると立ち止ってしまうので、無理矢理引っ張っているのだ。
歩く事十分。
やけに大きい襖を前にして、引いていた腕がようやく離れた。

「この先に師範と師範代がいます」
「師範代は誰？」
「？　ルー・イー師範代ですが？」

なにを言っているんだという目を向けられ、そうですか、と百八は呟いた。

「案内してくれて、ありがとう」

笑って礼をいい、百八はゆっくりと襖を開けた。部屋の中には、二人の人物。
鉄心とルー師範代。
両者の目には、うっすらと涙が浮かんでいる。
部屋を入る前に一礼し、中に入って正座を組む。

「……」
「……」

「……」

沈黙。

三者共に、何を言っていいのか分からない。

鉄心は言いたい事、聞きたい事が多すぎて。

ルーもまた同じだが、鉄心より前に問う真似は出来ず。

そして、百八は――

「爺様」

と。

百八は鉄心を呼んだ。呼ばれた鉄心はピクリと眉を揺らし、次いでふるふると震えだした。

「僕の事、覚えて、いますか？」

「……勿論じゃとも」

声も同じく震えていた。涙ぐんでいた。

「一日たりとも、忘れたことなどないわ……ッ」

年がいもなく涙を流し、ぐいと裾で拭う。もらい泣きしたのか、ルーもまた涙を流していた。ボロボロ流していた。

「ルー先生も、お久しぶりです」

「よく、よく生きていてくれタ……！」

「師範代、なれたと聞きました。おめでとう、ございます」

「あァ、しかし師範代になれた時よりモ、今、君が生きていてくれた事の方が、何倍も嬉しイ……！」

それからまた沈黙。しかしその沈黙は冷たいものではなく、それを噛みしめるような温かなものへと変わっていた。

「髪、伸びたの」
「はい」
「飯は、ちゃんと食べておったか」
「たまに抜きますが、おおぬね。きちんと」
「今まで、何処二？」
「……詳しい話は、言えませんが。衣食住には、困りませんでした」
「なぜ、なぜ今まで顔を――連絡をくれんかった……？　あの事故からロクに日も立たずに病院からいなくなったと聞いた時から、ワシはずっとおぬしを探したのじゃぞ」
「……」
「答えられぬか？」
「療養のために」
「それならば病院に」
「いえ。心を……治したくて」
「……」
「……」

その言葉に、鉄心は口を閉じた。
踏み込めない。
あの時、あの場にいなかった者に、口出し出来る事ではない。
これ以上の詰問は、閉じた傷を再び抉るようなものだから。

「これからどうするのじゃ」

だから、かつてではなく、これからの事を問うた。
ここに来たという事は、ここで暮らしたいからだと鉄心は思っていた。それは勿論ルーもで、だからか、百八は困ったような笑みを

浮かべて首を振った。

「分かりません」

「なに？」

「僕が、ここに来たのは、ただ、挨拶に。生きていると、伝えたくて。それだけです」

「……住まいは、あるのか？」

「……今は、特に」

「ならばここ住め。いや、住んどくれ。遠慮などするな。ワシはお主に……お主たちに、なにもしてやれんかった。ただ、あの焼け野原を見ている事しか出来んかったワシに、報いさせてくれ。でなければ、おぬしの父に天国で逢わす顔がないわ」

「――――」

父、天憧十樹。その名を鉄心から聞いて、百八はふと目を閉じた。苦しそうに。しかしそれも一瞬の事で、武道の達人である二人は気付かなかった。

「でも、お金が――」

「そんなもの気にするなと言うておる！」

「……。しかし」

「嫌というならそれで構わん。ただ、住いが見つかるまではここに居てくれ、頼む」

「私からも頼むヨ、百八クン」

二人から頭を下げられ、百八は笑った。嬉しそうに、同時に悲しそうに。

「……僕は、いていいんですか？」

「勿論じゃ」

「勿論だヨ」
「……甘えさせて、もらいます」
「うむ、では部屋を用意しよう。積もる話はその後じゃ。ルー」
「分かっていまス。すぐ用意を」

立ち上がって去っていくルーを目で追いっていると、ふと鉄心はおぉ、と嬉しそうに声を上げた。

「百代にも伝えないとのぉ」
「――――ッ」

百代。
その言葉に、その名前に、百八の脳内は真っ赤に汚染された。
声なき声。様々な想いと感情が頭の中で荒れ狂う。頭が爆ぜるような痛みに、呻きながら蹲る。
それに気付いた鉄心は血相を変えた。

「ど、どうしたんじゃ百八！？」
「お――お願いが、あります」
「なんじゃッ！？」
「モモ――……彼女に会うのは、もう少し、待って下さい。一年……いえ、半年でもいいんです」
「な、何故じゃ？　昔はあれだけ懐いておったじゃろう？　百代もお前が病院からいなくなったと聞いた時、泣いておったんじゃぞッ？」
「お、ねがい、します。どうか、おねがい、します。時間、を。下さい。お願い、します」
「……」

悲痛なお願い。否、懇願。頭を抱いて震えだすその姿は余りに痛

々しく、鉄心は百八を抱きしようとして　　――直前、その目を見た。

目を見れば分かる。

それは武道において最も目立つ言葉だ。窮めれば窮めるほど読み合いの重要性が増していく。読みとるのは体の動き、重心などと数あるが、最たる読むべきは目だ。目は口ほどにものを言うというように、目は意志を語る。

武道を窮めた鉄心は、対峙した者の目を見れば何を考えているか、どう動くかを二手三手先、いやそれ以上先まで見とおす事が出来る。故に、見てしまった。

観えて、しまった。

この少年が、百八が抱える得体のしれない……闇を。

黒い瞳には――灼熱、血、怨嗟、悲鳴、嫉妬、死、死死死死死死死死の地獄。百七の骸が焼かれる灼熱地獄。

「――――」

図らずしも、呑まれた。その黒過ぎる瞳に。

深すぎた、黒に。

一歩下がってしまった。

「……分かった」

だから――そう、答えるしかなかった。

「ありがとう、ございます」

「ただし一つだけ教えてはくれぬか？」

「なにを、でしょう？」

「おぬしは今、何処をみている？」

震えが止まった、凍るように。

「……」

「今、おぬしの目を見て、観た。地獄のような光景を。ぬしは、今ここにおるのか？」

「……」

「あの時からぬしは」

「僕は――」

遮るようにして開いた言葉は、願うように。

「ここに――いたいです」

祈るように、手を組んで。

「炎は、消えない。消えない、んです。でも、僕は、前を、向きたくて。生きたくて。だから、ここにくれば、消えると、思って……」

「分かった」

鉄心はその震える子供の首筋を、とん、と優しく叩いた。「あっ」と声を漏らして百八の意識は途切れた。

「すまぬ。詳しい事を知らぬ今のワシには、こうして眠らせることしか出来ぬ。せめて穏やかに眠っておくれ」

倒れた百八の頭に手を添える。手には微かな燐光――気だ。温かな気が百八に送り込まれ、乱れていた呼吸が整い、苦悶に満ちていた顔が次第に安らいで行く。

こちらに近づいて来るルーの気を感じ取り、鉄心は再び空を見た。

照り輝く太陽。それは天。天憧。その向こうに、懐かしき弟子の姿を見ようとして。

？これが私の天道なのです。切磋琢磨して成長する子供を見ているのが、私の楽しみなのです？

あの言葉を思い出して。

「生きておった。それだけでも、今は良しとしよう。のぉ十樹よ……」

1・・・挨拶（後書き）

今後の展開やヒロインなど、希望があったら言ってくれ。
正直、ラストしか考えてないからそこまでの工程作ってないのよ

2・・・運命

目が覚めた。だが太陽はまだ上がっていなかった。

起きて目覚まし時計を確認――朝の四時だ。

全身にかいた汗を拭い着替える為、天憧百八は起き上って周囲を見渡した。

広い部屋である。

ここは鉄心が用意してくれた百八のための部屋……いや、アパートだった。

川神院ではない。

かつて、百代に会うのに時間が欲しいと頼んだが、同じ院内でそれは不可能だ。常人相手なら可能かもしれないが、半径数キロの気を識別できる彼女の事だ。どんなに隠してもいずれ見つけ出すだろう。

だからここは川神院ではない。そこからほどなく離れた山が近くにあるアパートだ。

ここに住み始めて早半年。季節は冬を過ぎ、春が芽吹こうとする2月の上旬。

あと二ヶ月も経てば、百八も晴れて川神学園に通う生徒になる――予定だ。

「学校かぁ……友達できるかなぁ、きちんとやっていけるかそこはかとなく……いやかなり不安」

流暢な言葉。もうかつてのような区切り区切りの口調ではない。半年間、国語の教科書を音読した成果だ。

カラオケでも歌った。……一人カラオケだが。

ともかく、そうした努力もあってきちんと喋れるようになった百八である。

「百姉ぇ元気かな……、ッ」

チクリと刺す痛みに眉をしかめるが、かつてほどではない。

遠目から彼女を見たこともあったが――後ろ姿ばかりで痛みもあったが――問題なかった。

ただ昔あった時も化物染みていたが、今はそれ以上の怪物と化していた。

五キロ離れた所から見ていたのに、どうして気付けるのか。

顔がこちらを向く前に退散したが、アレは下手なホラー映画よりも心臓に悪い。

川神学園に通う生徒になる――予定。

予定は予定だ。決定ではない。

川神学園の学長でもある鉄心と体育教師のルー師範代はとうに決定と言う事にして入学費は当然。教科書やノート、鉛筆など学業に必要な物を全て揃えてくれたが、それでも予定なのだ。

予定を決定に変えられない最大の懸念――百代に会う事。

これが百八にとって如何ともし難い。

会って、出会って、なんて言えばいい？

こちらにも事情がある。鉄心の時のようにはいかない。下手したら全て終わる。

積み上げた年月が、全てなくしてしまうかもしれない。

そこら辺の事情は誰にも話していない。本当なら話さなければならないのだが、それでも躊躇われる。

だからこれは自分でどうにかするしかない。

「……考えても始まらない。起きよっと」

パチンと電気を付ける。

照らされた部屋には――何もなかった。

教科書や体操着はあるが、それだけだ。

漫画やゲームは皆無で、衣服は制服と体操着一着。そして白い流し着が三着のみ。最低限のものしかない。

というか、最低限のものもない。

例えば。

「……食糧、切れてる」

食べ物とか。

「買って来るか」

財布を手にし、百八は寒風に体を震わせて外へと繰り出した。

そこで、運命の再開を果たすとも知らず。

テクテクテク。街を歩く。その都度百八は人の目を引いていた。

白い髪、白い眼帯に白い流し着。

かつて変わらぬ姿は、更に積もった雪と合わさり、幻想的と言っていいだろう。

日も出ぬ空だ。暗い空が、白い世界と白い彼をより引き立たせる。

ただでさえ恰好からして目立つのに、加えて百八は美人だ。

スラリとした肢体は細く、肌もきめ細かい。夏場は一枚の流し着で胸のふくらみがないので女の間違われる事は少ないが――それでも日に二、三回声を掛けられたが――重ね着している現在は強調する平らな胸は隠れ、近くから見ても相当な美人に見えるだろう。

触れれば折れる、そんな花のように。

そして花には、

「ねぇそこのお嬢さん」

「こんな時間にどおしたの？」

「寒くない？　温めてあげようか？　俺のナニで」

虫が寄る。甘ければ甘いほど、誘われるように虫が。

特に最後の虫は最低といっていいだろう。セクハラではないか。

振り返ればコートを着た三人の男。卑下た笑みを浮かべて立っている。

それに眉を顰め――る事もなく、百八は笑顔で答えた。

「おはようございます」

「「「――――」」」

笑顔の挨拶に、三人は呆けた。

予想外の返しに、というのもあったが。

その笑顔が、あまりに綺麗で、純粋で、抱いていた邪念が一瞬にして削げ落ちたのだ。

「え、あ、はい。おはようございます――じゃなくて！」

「？」

「首を傾げるな――って、あぁ、なんだこいつ、すげぇそそるんだけど！」

再燃する邪念。ひゃっはー！　と叫ぶ獣共。

「ね、ねぇねぇお嬢さん、俺さ、美味しい飯や知ってるんだけど、どうかな？」

「それよりも俺ん家来いって！　旨い飯たらふく食わせてやるから！」

「栄養満点だぜ！　……白くてちょっと苦いけど。ふほっ」

最低だ。最低だこいつら。特に最後の奴がもう終わっている。頭がピンクというかもはやどどめ色だ。

逃げるんだ百八。

断るんだ百八。

ああけれど、人を疑わないのかこの男の娘は。手を引かれ、されるがままに付いて行く。

「僕、おでん食べたいです」

駄目？　と首を傾げる百八に、一人が突如打ちのめされたかのようにぐらつき、ついで鼻を抑えた。

「ぐ……」

「ど、どうした？」

「ちょ、すまん。鼻血が……」

「僕っ娘キタコレーー！」

「？　？？　？？？」

連れて行かれる百八。

あぁ駄目だ。これはもう駄目だ。完全に信じているようだ。

その顔にはなんの疑問もない。

本人の頭の中ではすでにこの三人で鍋を囲っているところを想像しているらしい。

鍋は食わせてもらえるかもしれないが、このままだと自分が食われる事に気付いていない。

男だと気付けばきっと無事に――という淡い願いはきっと叶わないだろう。

この容姿だ、ついていても知ったことかという事になりかねない。

選択肢を間違えたのか、いやそもそも出ていないか。

このままではバットエンド直行。

シーンが一つ埋まる代わりに本作は早くも終了し、Ｒ－１８専用掲示板に移行しなければならなくなるだろう。

作者としてもやぶさかではないが、そんな終わりは誰も認めない。

当然、彼女だって認めない。

「おい待て貴様ら」

声に、百八は鍋を食べる温かい想像が一瞬で消えた。

凝固したと言ってもいい。足が凍り体が凍り、思考も心も凍った。

それは覚えのある声。それは懐かしい声。

夢に見るほどに、焦がれた人の声。

振り向けない。

振り向けば、どうなるか分からないから。

泣いてしまう？　きっと泣くだろう。無様の姿は見せたくない。

頭痛が走る？　それもある。遠目でも頭痛が酷いのだ。こんな至近距離では気絶するかもしれない。

いやそもそも。

自分を、保つことさえ――……。

「んだよ、あー？」

「なにってうわ！？　すげぇ美人！」
「モノクロ美女お持ち帰りかい！？　おっもちかえりぃ……なのかいッ！？」

男達の声が頭に響く。

美人。男達がそういうのだから当然女性だ。

モノクロ。自分が白だから相手は黒だ。

そして覚えのある声。ああ間違いない。振り返らなくても分かる。そうだ覚えているぞこの気配。

「いやぁ、たまには本能に従ってみるもんだな。こんな糞寒いどうしてか目が覚めて夜更けに街に出てみたら、綺麗な花に虫が集ってんだから」
「……は、なに、あんたやんの？」
「いいぜ、掛かってこいよ」
「屑木君と坐古君は空手と柔道の有段者なんだぜ！　怪我する前に俺らと一緒にランデブーしようぜ！」
「……ランデブーとか古臭い奴だな。おい、そこのお嬢ちゃん」

「――――っ」

背中越しに声を掛けられて、思わずビクンと反応し、同時に百八は自分が女性に間違われていることに気が付いた。

「ちょっと離れてろ。私がこの虫三匹ちょいと摘まんで捨てるから」

「いってくれんじゃん、よぉ！」

雪を蹴る音。

百八は振り返らないし動かない。どうなっているのかは分からないが、結果だけは分かる。

べしべしどかんどかん。

都合二度の打撃音。そして打撃とは思えない音が二度。

「そ、そんな屑木君と坐古君がっ！？」

「おいそこの芋虫。その屑君と雑魚君連れて大人しく土の中にもどれ。じゃないと」

パキリ、指を鳴らす小気味良い音。

きっと良い笑みを浮かべているんだろうなと苦笑と共に思い出し、ようやく体が自由になった。同時にこの場から去る。

「潰しちゃうぞ☆」

「さーせんしったー！」

ぴゅーと逃げていく男。

「なんか最後のやついちいち台詞にネタいれてくるな、しかも古いやつ。ま、それよりも可愛い女の子は――っていない！？」

声の主である女性が振り向いた時には、可愛い女の子？は消えていた。

「はぁ――はぁ――はぁ――」

何度か曲がり角を通り、後ろを振り返る。大丈夫、ついて来ていない。

良かった、と安堵の溜息を吐きだし、同時に無視していた頭痛に足がもたれた。

「あたっ」

ぱしゃん。溶けた雪に顔面ダイヴ。鼻を打って服も濡れた。痛くて寒いが、おかげで頭痛も治まった。

「いつか会おうとは、思っていたけど……こんないきなりはちょっとな」

全く心臓に悪い。

これで振り向いてたらもうどうなっていたか。なんて思いだしていると、途端目頭が熱くなっていた。

会いたくなかったのか？　いいや違う、会いたかった。

振り返って、名前を呼んでみたかった。

でも無理だ。

少なくとも、こんな様じゃ。今の……自分では。

「本当に……ままならないね」

自嘲気味に呟いた言葉に、

「全くだな」

答える声があった。

「――――」

再び凍る体。さっきの声、それも凄く近い。

気配を探れば……なぜ気付かなかったのか。距離は一メートル。手を伸ばせば簡単に届く距離。

「お姉さん、離れろとはいったけど、逃げろなんて言ってなかったんだけどなー。というか大丈夫か？　転んだみたいだが寒いだろ。

私のコートに入るか、ん？」

それは善意の言葉だ。肩に触れる手を咄嗟に払ってしまった。

「あ……」

声はどちらだ。払うと同時に振りむいた。

背中に立っていた彼女の姿が、限界まで開いた片目に映った。

黒真珠のようにきめ細かい黒い髪と、勝気そうな赤い瞳。小さく開いた唇。

覚えている。覚えている。

まだ何も知らなかった子供の時に一度だけ会った彼女。

あの頃から憧れていて惚れていた。

きっと成長すればこんな美人になっているんだろうなと頭の中で描いていて、

でも実際見てみれば想像よりも遥かに綺麗で。だから。あぁだから。

「百姉ぇ……」

言ってしまった。洩れてしまった。声が、想いが。胸に秘めてい

た想いを籠めて、万感籠めてその名前を。

同時に視界を焼き尽くす赤赤赤。

血、慟哭、骸の丘に立つ誰か。灼熱の地獄。絶え間ない絶叫と身を焼き尽くす赤い色。

逃げろ。本能が叫ぶ。

戻れ。理性が叫ぶ。

ここにいては、お前■ぬぞと叫んでいる。

「――――ッ」

行動は速かった。凍っていた体は解凍され、全速力で後退する。

早い。一流の武人の踏み込む速度に劣らない。

だがそれは下策という他ない。

相手は川神百代。強者に飢える美女の野獣。

当然、そんな反応されれば追うに決まっている。

「……」

筈――なの、だが。

どういうわけか、振り払われた手をそのままに、ぽかーんと口を開いてそこに立っていた。

我に帰った時にはもう遅い。逃げた白い人影はどこにもない。

足跡も……見つからない。雪に残る跡を考えてか、白い影は雪の積もった地面ではなく建造物の壁を蹴り、屋上まで去って行った。

一足跳びで屋上に着地するが、影も形もない。

気配で追おうにも範囲外なのか隠しているのか捉える事は叶わなかった。

「なんだったんだよ全く」

柳眉を寄せ、ん～と言いながら先程の女の子（彼女の中では）を頭に思い浮かべる。

「かなりの美人だったな、可愛い系も混ざった。あと白い、真っ白だった。会った事は……ないな、うん。一度会えば忘れないぞ。それにあの三角蹴りからしての腕も相当だろうな」

うんうんと頷いて納得するが、しかし眉が寄るのは止まらない。

「じゃあなんで、この子は私のこと知ってたんだ？」

川神百代は有名人である。

武術界隈ならば、その国の首相よりも。

だから相手から一方的に知っているのは別に珍しくもなんともない。彼女もきっとそうなのだろう。隣の県からわざわざ喧嘩を売りにくる奴だっているくらいだ。

でも。

――百姉ぇ……――

悲痛な声と涙に濡れたあの表情。

あんな風に、あんな顔で、初対面の相手の名を呼ぶだろうか？

あんな、聞けば涙が出そうな声音で。

「いや、そういえば昔――っくしゅん！　うぅぅ〜〜〜……」

思い出の底に埋もれていたセピア色の記憶。

それがなんだったのか思い出そうとしたところで、くしゃみと寒さに震えだした。

「考えるのは後々。まぁ、またどっかで会うだろうし。あーもう、ピーチジュース買いに出ただけなのにどうしてこんな事になるんだ

よー」

ぶーたれながら百代は帰路へと足を向ける。

――百姉ぇ……――

「……」

足を止めずに振り返る。リフレインする言葉。

先程思い出そうとした記憶はもう見つからない。頭を捻っても見当たらない。

まぁいい、どうせ夢みたいなものだろう。

2・・・運命（後書き）

いきなり出会ってしまった百八と百代。
ちなみに百八君、かなり美人です。
何度もナンパされて、その都度引っかかり、ホテルに連れ込まれた事数限りなく。
でも大丈夫、貞操は無事です。
ファーストキスも無事です。
ボディータッチ（素肌）も守っています。
汚されてなんかいません。純白です。
いつか汚れるだろうがな。

3・・・夢現（前書き）

読者さんほんとすんません。
書いていると色々直したくなるんです。
ちょっと追加したから許して……

3・・・夢現

天憧百八にとって、睡眠とは出来ることなら一生取りたくないものであった。

眠れば蘇る幼い記憶。それは優しい父と、自分を含めた１０７の血は繋がっていないけれど大事な家族。大好きだったたくさんの兄弟姉妹達。

笑っている笑っている。皆幸せそうに。

広い道場で全員が父の掛け声と共に構えて拳、蹴りを放つ。

稽古して、勝ち負けを決めて、結果に泣いたり怒ったり、拗ねたりブーイングしたり、ドタバタとしたけれど充実した日々。

あぁでも、と。幼い自分を見ながら今の天憧百八は呟くのだ。

明晰夢。自分を自分と認識して見る夢の事だ。

百八はただ幸せだったかつての回想を第三者の視点で眺めている。その中に自分が含まれている事に軽い疑問を抱くが、やはりそんなものは夢だからでカタがつく。

この後、稽古が終ると同時に幸せのメッキは溶け落ちて、赤黒い正体を現す。

倒れ伏す１０７の家族。そして父。立ち竦む自分。それは赤。全て焼かれる赤。全てが終わる終末の色。

そう、なる筈だった。

?お久しぶりです、お師匠様。息災ですか??

?おぬしが抜けてちと寂しいが、なぁに問題ないわい?

あれ?　と予想していた地獄ではなく、現れたのは別の場面。

それは八歳の時。川神院の師範と師範代候補の二人と、もう一人、師範が連れてきた黒髪の綺麗な少女と出会った時の記憶だった。

地獄を回避した事に安堵し、同時に思う。なぜ、今回はこれなのだ?

かつての記憶を夢で見る時、百八は必ず地獄を見て目が覚める。

しかし今回は違う。こんな事は初めてだった。

?百八、挨拶しないさい?

人見知りする小さな自分を、苦笑しながら背を叩くのは線の細い、枯れ木のような男性。

父だ。懐かしい、とは思わない。夢でいつも見ていたから。

だけど、あんな風に穏やかに笑う顔を見るのは久しぶりだった。

?百八、です。はじめ、まして？

もう少しちゃんと挨拶しようよ。そう自分に言ってしまいたくなるくらいたどたどしくて弱々しい挨拶だった。

それに比べて。

?私は百代だ！　よろしくな百八！　私の名前に似ているくせにぜんぜん似てないな！？

彼女の挨拶は、なんと気持ちのいい事か。

そんな彼女に、一目で自分は憧れを抱いた。

見ているだけで元気になる、見惚れるような力強い気と綺麗な彼女に。

思えばあれが、自分の初恋だった。

それから難しい話をし出した父と師範達から離れ、手を引かれて遊びに出た。

彼女の手を引いて歩く事がどうしようもなく嬉しくて、とにかく色々一生懸命彼女を楽しませようと頑張った。

?百姉ぇ。何かしたいことある??

?バトルしようぜ!?

?……?

彼女はバトルマニアだった。

というわけで、そんな彼女の要望に応える為に稽古に付き合ったものの、才能の塊のような彼女の相手なんて、自分に務まる筈もなく。

ボロボロにされた後、勝ち誇るように胸を張る彼女を仰ぎ見て言ったのだ。

?百姉ぇは強いね。もう誰も勝てないんじゃないの??

?ん〜?　そんなことはないぞ。私を連れてきたジジイとルー先生と釈迦堂さんにはまだまだ勝てないな?

?あそこの人達と同レベルなんだ……?

?なんせ私はいずれ最強になる女だからな!?

堂々と言う彼女に、ならばと。

?:じゃあ僕は最強の男になる！？

自分も最強になる、思わず口にした。

?:あ、お前じゃムリ？

即答されたが。

?:ひどい！？？

?:ふふ、そうだな。じゃあいずれ私は最強の女になるけど、もしお前が最強の男になったら――？

あぁ、そして彼女は、なんて言ったんだっけ？

覚えていない。そこだけ音が遠い。

どれだけ澄ましても、はにかみながら言ってくれた言葉を思い出す事はできなかった。

そうしてすることもなく、縁側で彼女と一緒に座っていた。

そしてふと退屈そうな顔をしているのに気付いて、慌てて言ってしまった。

?:折り紙、しようよ？

自分でも女々しいと思っていた、そんな趣味を。

案の定、百姉ぇは嫌そうに眉をしかめて「え～」と口をへの字に

曲げていたが、このままでも退屈だしと付き合ってくれたのだ。

?おいこら、キレーに折れないぞ。この折り紙ふりょーひんだ?

?そんな乱ぼうにしちゃダメだよ。ここはこう折って、こうやるんだ?

?……は?　おい待て百八。そこをどうやったらこんなのになる。とらんすふぉーまーもビックリ変形だぞ?

?フツーに折っただけなんだけど??

?ウソだっ!?

?ウソじゃないよ!?

なんて言いながら、結局彼女の折り紙は壊滅的で――そうだ、最後にふてくされた彼女に、折り紙を一枚折ってあげたんだっけか。

緑と白とピンクの三枚の折り紙で作った桃の折り紙を。

僕が彼女に一つ。見よう見まねで彼女が僕に一つ。いっちゃ悪いが、凄い不細工な出来だった。

渡した後で自分の作品に不満があったのか、やっぱり返せと襲い掛かってきたが、死守した。

思えばあれが彼女に対する初めての勝利だったのかもしれない。

納得いかないと頬を膨らませながら、次は必ず上手く折ってやる

からな！　覚悟しておけよ！　なんて捨て台詞を釈迦堂さんに首根っこ掴まれた彼女に

？百姉ぇ！？

また会おうね、とぶんぶん手を振って見送った。

彼女はそんな必死な僕に、拗ねながらも笑って手を振ってくれた。

――結局、またなんて機会はなくなってしまったけれど。

「あぁ――」

声を出す。そろそろ覚める。何度も経験して分かるようになった感覚だ。

視界が全て白に染まる。

赤ではない。

白だ。

地獄ではない。

幸福だ。

懐かしい、穏やかなまま覚める夢。

だから。

そんな夢が、自分にほんの少しだけの勇気をくれた。

「……」

目覚めは静かで、穏やかだった。

日が差したカーテンを見つめる事十分間。

ふと、なんの気なしに声が出た。

「……学園行こうかな」

燃え尽きた思い出は戻らない。

だから、もう一度手を伸ばしてみたい。

そう思って、隅に置かれた学園関連の紙束へと手を伸ばした。

こうして物語は動き出す。

嵌る筈のなかった歪んだピースをねじ込んで。

本来ある筈だった青春物語は、緩やかに。

おかしな方へと、誰にも気づかれずに進み出して。

3・・・夢現（後書き）

次はみんな大好きマユマユと邂逅です。
ほのぼの出来るかは分からんがな！

4・・・入学式『由紀江フレンド・上』（前書き）

ちょっとサブタイトル変えただけです。

4・・・入学式『由紀江フレンド・上』

春爛漫の桜吹雪。

四月。

川神学園。本日入学式。

本日は極めて快晴なり。本日は極めて快晴なり。

窓から差し込む陽光を浴びていた百八はいそいそと川神学園に行く準備を続けていた。

「えー……っと、服良し、髪よし、教科書よし、ノートよし、ハンカチとティッシュも持った」

必要な物を全てバックにつめこみ、玄関に向かうが、立ち止まりUターン。

「忘れ物、本当にないかな？」

そしていそいそとバックの中身を全て取り出して点呼。

天憧百八、これで３８度目の鞄チェックである。

「あぁぁ、どうしよう。大丈夫かな、これ本当に大丈夫かな？　薬足りてる？　忘れ物ない？　着替えって必要なんだっけ。あ、蛍光ペン入ってなかった。ノートは……英語ノート必要？　１８行と１５行どっちがいいんだろ？　やっぱり二つ……でもそれだとかさ張

るし、たくさんもってったら変な奴って思われそうだし」

本日は入学式。学年は2年。本来なら荷物など形だけで他は全く要らないのだ。しかし学校と言った場所に無縁だったこの男はそれが分かっておらず、何度も何度も入念にチェックしていた。

そして確認する度、バックが膨らんでいき、現在はち切れんばかりに詰まっていた。

耳を澄ませば聞こえて来るだろう。ミチミチという限界を迎える音が。

「――って、あああああ、そろそろ出ないと間に合わない……」

現在時刻が本当なら間に合わないが、この日の為に一時間ずらしていた事を忘れていた百八は更にあたふた。

何度も玄関とバックに目を向け、やがて意を決し玄関へと足を向けた。今度はもう立ち止まることもなく扉を開けて。

「……行って来ます」

誰もいない住まいを振り返り、鞄を背負ってガチャンと締める。

天憧百八。見た目は美少女、心は子供。現在気分は遠足に向かう子供であった。

「おぉ、桜道」

都会の整理された緑に改めて感動しながら百八は通学路を歩いていた。百八を見つめる視線は多々あったが、本人はそんなもの慣れたもので、気にもせず歩いていると。

だだだだだだっ！！！

と、後方からかなりの速度で走る影があった。

当然百八は気付かず、走る影は前が見えていないのか、百八の背に衝突。

「？」

軽い衝撃に振り返る。そこにはぶつかった人物がこけ――

「後ろ回り受け」

――そうになっていたので、踵を返しその手を取って抱き寄せる。

しかし鞄までには手が届かず、地面に転がって行ってしまった。

「大丈夫？」

「――……！？！？？！？」

抱いた人物――少女を引き離して様子を伺うが、目が錯乱したかのように動き回り、ぷるぷると高速で震動していた。口からは理解不能な言語が飛びだしており、まぁ、ようするにだ。

テンパっていた。とんでもなく。

「あ、あわ、あああああああああわわわわ、あたし、わたし、すすすすす」

「怪我ない？　地面に付く前に手を引いたと思うんだけど、痛い所とかない？」

「な、ななななないです！　大ジョＢＵです！」

「……そう？」

言語機能が少なからず破綻していたが、見た所怪我もなく、本人もそう言うので手を放す。

硬直している少女の近くに落ちていた鞄と馬のストラップを拾い上げて渡した。

「はい。これ鞄とストラップ」

「あ……あ、わ、は、い」

「もう落とした物はない？」

「は……はい！　わざわざ拾って頂きまことにありがとうございますっ！」

ギン！

効果音を付けるとそんな感じの眼光で少女に睨まれた。

もしや抱きしめた事を怒っているのかなと首を傾げ、少女もその眼光のまま釣られるように首を傾げる。

「……」

「……」

今度は反対側に首を傾げると、少女も磁力で引かれるように首を傾げる。

勿論眼光は維持してである。

実に怖い。

何をやっているんだろうと百八は思い始めていたが、止める機会を逃してしまい、そのまま時間が過ぎていると。

「おーい、そこの見つめ合っているお二人さん」

声を掛けられた。

「はひゃい！？」

少女が悲鳴を上げて、百八も振り向くとそこには気だるそうな目をした男子。

制服からして川神院の生徒だ。腕には『入学式案内係』と書かれた腕章を吊るしている。

「えっと、今いいかな？　ずっとそのままだと色々俺も困るから声をかけさせてもらったんだけど」

「もももももちろんです！」

と少女。そしてハッ！　とやってしまったという顔をして百八に慌てて振り返る。

「いえ今のは別に貴方と見つめ合っているのが不快だったというわけではなくむしろどうお礼すればいいか悩んでいただけであってけっしてそんな失礼な事を考えていたわけでは……！！」

「あ、うん、うん。分かった。大丈夫だから、別にそんなこと考えてないから」

「ありがとうございます！　ありがとうございます！　ありがとうございます！」

「……。あ～、じゃあちょっといいかな、そこの一年生？　その手のものって刀？　サムライソード？」

「え？　あ、はい」

素直に頷く少女。なるほど手には紫色の竹刀袋が握られていた。男子生徒はふーんと頷き、

「もしもしこちらポイント２３。ええ、異常ありません。ええ、逆に退屈なぐらいですよ。では」

「？」

「はえ？」

「ちょっとごめん。定時報告してた。そしてそこの……」

と男子生徒が今度は百八に目を向ける。少し驚いたかのように目を開け、その手が引く物へと目を向けた。

「君も入学生？」

「うん？　うん、そんなところ」

「？　じゃあ、その手の荷物はなに？」

「これ？」

言われて、百八は荷物を前に持ってきた。

そしてガラガラとローラーが回る音。……

旅行バックである。

鞄ではない。

旅行バックである。

鞄ではない。

パンパンである。

「旅行バックですけど？」

「いや、そんな疑問詞つけられても困るんだけど……なんでそんな鞄？」

「変ですか？」

「うん」

即答された。

その言葉に百八は多大なショックを受けた。

変と言われたのが胸に刺さったらしい。

今度は少女に目を向ける。縋るように。君だけはそんな事言わないよね？

そう瞳に想いを乗せて。

「……変？」

「え？　あ、あ～……少し」

想いは届かなかったようだ。

ずーんと気落ちする百八に、少女はまたあたふたするが、男子生徒は気にせず質問。

「で、その鞄の中のって、なに？」
「ただ荷物だけど……」
「入学式と同時に旅行でも行くの？」
「違うよ？」
「じゃあなんで旅行バック？」
「入りきらなかったから」
「……」
「……」
「……」
「……おぉいまゆっち～、ここに猛者がいるぜ～（ぼそっと）」

そんな問答を続けていると。

「いたいた、君。銃刀法違反って知ってる？」
「え゛？」

警官が来た。少女の手に握られた竹刀袋を確認して近づく。

「さぁ一緒に来てもらおうか。そして君は……」

警官の目が、今度は異常な量の荷物に向けられた。

何を言われるか悟った百八は、間髪いれず答えた。

「ただの荷物です（キリッ）」

「入学式にそんな荷物いらないだろう」

「……あれ？」

正論であった。

「君もちょっと来なさい。危ないモノがないか確認させてもらうよ」

「え、でも入学式が……」

「いやね、私も本当はしたくないけど、入学式にその荷物をもってくる子は普通いないからねぇ」

「なん……だと」

「というわけで君も来なさい」

「警察沙汰……」

「普通じゃない……」

ズーン。

少女と百八はブルーオーラを発しながら、警察に連行された。

それを遠目で見送った男子生徒は、

「異常ありませんって報告は異常あるって事なのさ」

どこかキザったらしく肩を竦め、再び別の方向へと歩き出した。

「問題なし。次からはもう少し肩の力抜いて行こうね」

「……ありがとうございました」

旅行バックの中身を点検していた時、警官の顔は引き攣っていた。

なぜならバックの中には乾パンと乾燥米袋が一袋。

2？ペットボトル三本と、他にも様々な物が多く入っていた。

警官は言った。君は被災地まで行くのかと。

いいえ行きません。ただ必要だと思って入れたんです。

そう返すと肩の力を抜けたように溜息を吐かれた。

「まぁ、学業にせいを出すのは良い事だよ。頑張りなさい」

「はい」

ガラガラとローラーを引きずりながら警察署から外に出る。

どうしてだろう、朝出かけの時よりも重く感じるのは。

あぁこれってやっぱり変だったのか。そうだよね、普通入学式に乾パンとか着替えとかいらないよね。

なにやってんだろう僕。いきなり変な人扱いされちゃったよあはははは。

再び先程通った通学路に向かう。

するとある程度進んだ先には、見覚えのある少女が立っていた。

「君さっきの」

「は、はははははい！　ささっ、ささささっきのです！」

声をかけるとビクンと後ろで束ねられた髪が跳ね、高速で近づいてきた！

「に、ににに荷物は、そ、だ、だだだ……」

「荷物？　あ、うん大丈夫。ただ量は減らそうねって言われたけど大丈夫だよ」

「そ、そうですか……」

「あれ？　でも君って僕が点検されている時に警官に連れて行かれなかった？　報告とかなんとかで」

「あ、はい。報告してからもう一度ここまで来ました」

「……」

その言葉にほうけた顔をする百八。それに少女はどう勘違いしたのか再び慌てだした。

「あ、あああああのもしかして迷惑でしたか？　す、すいません。私みたいなのに待たれていても迷惑ですよね、ほんとすいません！　すいまっせん！」

「え？　ああいや違うよ。違うって。ただ待っていてくれたんだなって。そういうの初めてだったからちょっと驚いちゃって」

ありがとう。笑って礼を言うと、少女のあたふたに＋赤面が追加された。効果は混乱の二重掛けである。

「へぇ！？　あ、いえ……いえいえいえいえいえいいえいえそんなお礼なんて」

ずずい。

「ありがとうございます！」

ギン！

また睨まれた。

「なんで睨むの？」

「え゛？」

「……？」

「え……と……」

少女は答えない。慌てた気配は一気に消沈化。そして悲しそうに目を伏せる。

あ、この子逃げるな。

なんとなく気配で察知した百八は手を伸ばし、同時に走り去ろうとした少女の手を掴む。

「ごめんなさぁぁぁあああ！？」

引き留めるつもりが引っ張ってしまい、傾いた少女の体は再び百八の胸の中に。

「あ、ごめん。加減間違えた」

「――――！！？！？？！？」

「一緒に行こうか。行く所も一緒だし。同年代の子と話すのも久しぶりなんだ」

「――え、……あ、はい」

「僕、天憧百八。君は？」

「私！？　わ、わわわたしは」

「吸って吐いて吸って吐いて」

「すー、すー、すー、すー……ごふっ！」

「吸い続けろなんて言ってないからね？」

「けほけほ、あ、わ、私の名前は黛けほ紀江ですっ！！」

「気歩紀江？」

「ち、違います！　私の名前は――」

少女はあたふたと、でも楽しそうに。

百八もこんな風に話すのは久しぶりだなと感じ、慌ただしい黛と名乗った少女に笑いかけた。

それがまた少女のテンパり具合を加速させ、二人は成立しない会話をしながら通学路を歩いていく。

そんな見ようによってはピンク色の光景に、遠くで見ていた警官は。

「リア充爆発しろ」

ケッ、とか呟いたそうな。

4・・・入学式『由紀江フレンド・上』（後書き）

誤字脱字、表現おかしいと思ったら感想に書いて下さい。訂正するんで。

次回、一人称視点に挑戦。楽しみにしてね

5・・・入学式『由紀江フレンド・中』（前書き）

タイトル変更しただけです

5・・・入学式『由紀江フレンド・中』

ワシは今、始業式の準備に取り掛かっておった。

といってもやることなぞ署名を書いてハンコを押すだけじゃがのう。故に手が空いており、クラスを受け持っていないルーと談笑するのは自明の理じゃろう。

それにルーとは話しておきたい事もいくつかあったしの。

話しておきたいこととはもちろん百八のことじゃ。

なんでも出来るくせに妙に抜けておるから、きちんと学園に来れるか心配じゃわい。

「ルーよ、百八は始業式の時、寝坊せんかのう」

「学長。彼の場合、寝坊ではなく、準備に時間がかかるのではないカと」

「おぉ、そういわれればそうかもしれんな。最初は少し不安じゃったが、ああも嬉しそうな顔している所を見ると、遠足前の孫達を思い出すわい」

「えー全ク。最初の頃は人形のようでしたが、最近は随分と話すようになりました。この前など一緒にブルース・ウィーの萌えよドラゴンを見たんですヨ」

……ジャッキー・チェンではないのじゃな。

「ちなみにジャッキーは全作品を二度見ましタ」

見過ぎじゃろう。しかし、そうか。

「なるほどのぉ。では、何か興味を持ったか？」

「……いエ、楽しんでくれますが、どうも物欲が乏しいみたいデ。先日アパートに訪れましたが、昔と変わらず何モありませんでしタ」

「そうか……」

むぅと唸る。

百八には趣味がない。なんでも出来る故かの。

勿論進めれば興味を持ってくれる、長続きせん。というか、途中で諦めてしまう。

飽きるのではなく、諦める。

興味はまだあるというのに、惜しむようにそれを離すのじゃ。

なにか、悪い事をしたというようにの……。

何故かは知らん。教えてはくれぬし。あやつにとって考えがあるのかもしれん。

……その考えが、分からんのじゃがな。

「ところで、彼の頭痛はなんだったか解りましたカ？」

頭痛。

百八は、どういうわけかモモに関する話題を出すと頭痛がするという偏頭痛を持っておった。

最近は眉を顰める程度で収まりつつあるようじゃが、最初の頃は酷いものじゃった。名前を聞いただけで痛みに震え、写真を見るだけで気絶するほどに。

それが精神的なものだというのは分からないでもない。

しかしなぜ、モモがトリガーになるのかが分からぬ。

聞いても頑なに答えず、ただ大丈夫ですの一点張り。

あやつについては何も分からん。

心を開いてはくれておる。しかし、開いた心の中で見せたくないものは絶対に見せてはくれぬ。

「……いいや。それでも学園に通うというからには、良い傾向なのじゃろう。ワシとしても、あの子とモモは仲良くしてもらいたいわい」

あやつはモモに並々ならぬ関心を持っておる。

気絶するほどの痛みに耐えてモモに会おうとするくらいじゃからの。

じゃが、その理由もやはり教えてはくれんかった。いや、一つだけ教えてくれたか。

?約束を守りたい。誓いを果たしたい？

そう言っておったな。

モモと会わせたのは、十樹に会いに行った時の一度だけじゃ。

恐らくあの時、何か約束をしたんじゃろうな。

……嫁にもらうとかいうなら、大賛成なんじゃが。

あの様子を見る限り、そんな甘酸っぱいものでもなさそうじゃしの。

「学長」

呼ばれ、顔を上げる。

そこには紫色のスーツを来た女史、風間ファミリーが集まっておる２－Ｆの担任である小島先生が立っておった。

うぅむ、いつ見ても良い体しておるの。

む、幾つか書類を持っておる。

署名とハンコじゃな。どれどれ。

ほれペッタンペッタン。

「ところで学長、今話していた人物は、もしや今日転校してくると言う天憧百八の事ですか？」

「うむ。気になるかの？」

「ええ、かなりの難度を持つ転入テストを全て満点で突破するなど前代未聞です。しかもどれも半分の時間も使わずに終えたと言うのだから尚更に」

「アレにはワシも驚いたのぉ……」

転入テストはいくつか難度がある。

その中でも一番難度が高いのが当然、S組転入テストじゃ。あれは五教科だけでなく、幾つか他の専攻分野を選択してやる筆記テストがある。

それを全て満点で突破するなど、普通はありえんじゃろう。ワシも見て驚いてしまったわい。

しかし疑問が一つ浮かぶ。なぜあんな点数が出せるのか？　イカサマをしていないのは知っておる、だが相当学ばなければ理解出来ぬ問題ばかりじゃ。

あやつに、そんな時間があったとは到底思えぬ。行方不明になってからずっと勉学に勤しんでいたとも思えぬし、あやつには謎が広がるばかりじゃなぁ。

「ワシとしては、F組に入ってもらいたかったのじゃがな」

あそこは確かに騒がしく問題児ばかりじゃが、他のクラスにはない活力で満ちておる。百八は活力に乏しいからの、分けてもらえればこれ幸いと思ったのじゃが……。

「学長、流石にそれは。学年トップの葵冬馬に並ぶ学力を持つ生徒を私のクラスに入れてしまえば問題が起こります」

そうなんじゃよなぁ。

S組み転入テストで合格、それもトップでした者をF組に入れるなど周囲の教師も許さんじゃろう。

「ぬぅ、百八も手を抜けばいいのにのぉ」

「学長……？」

「冗談じゃよぉ冗談」

おおう、小島先生の額が震えておるわ。怖いのぉ。

しかし口ではああいったが、本音じゃ。あやつにS組のようなピリピリとした空気は合わんじゃろう。

常にのんびり、のほほん、ぼけーとしておるからの。……む、そういえばS組にも似たような気質の女子がおったな。それなら問題はないのかのぉ？

「うむ、終わったぞ」

「ありがとうございます。少し話が戻りますが、天憧百八と学長は知り合いで？」

「……まぁの。聞きたいことでもあるのか？」

「ええ。出来れば話を伺いたいと思いまして。今が忙しいと言うのなら、また後ででも構いませんが」

ふむ、そうじゃな。あやつに理解者が多いのはワシにとっても都合がよいし、あやつにとってもプラスになるじゃろう。

「今で構わんぞ」

「ではS組の宇佐美先生も連れてきます。私よりも知らねばならぬ立場でしょう」

「うむ」

くるりと踵を返して宇佐美の所に小島先生は向かいおった。むぅ、良いお尻しておる。

眺めておると小島先生が宇佐美を連れてきおった。心なしか嬉しそうじゃの宇佐美。

ワシからは頑張れとしか言えんわ。

「学長、どうしたんで？　オレまだやらなきゃならない書類残っておるんですがね」

「すまんの、話したいのは今日転入してくる天憧百八の事じゃ」

「百八？　あ～あの馬鹿難易度の高い試験をオール満点でクリアした奴ですか。彼になにか問題でもあるんで？　面接んときは随分大人しい子だとは思いましたが？」

「うむ。それで小島先生の口から言ってもらおうかの、聞きたい事があるとはなんのことじゃ？」

「彼の経歴についてです」

「……」

「履歴書を見せてもらいましたが、彼は中学校どころか小学校も出ていません。更に半年前までは行方不明者扱い。ロクな記録がありません。学長自らの推薦だったのであの時は何も言いませんでしたが、教師としては少し、話を聞いておきたいのです」

「それは、百八の転入に反対……というわけではないのじゃな？」

「生徒は学ぶ事が基本です。反対する訳がありません。ただ、小中を飛ばして高というのは納得いきませんが……大本としては、知りたいだけです。彼がどういう人間なのか」

「なるほどのぉ」

流石小島先生、教師の鑑じゃ。

宇佐美も流石小島先生ですねと太鼓持っておらんで教師の気概を見せい。

じゃから袖にされ続けておるんじゃぞ。

しかし、知りたいだけか。それはそれで難しいのぉ。

百八を語るにはあの事故が欠かせん。それに父親もの。

ルーに目をやると、コクリと頷く。うむ、ならば話さねばなるまいて。

「まず、あやつの父親の名じゃが、知っておるか？」

「いえ、知りません」

「ふむ、では一つヒントじゃ、あやつの姓はなんじゃ」

「天憧ですが……まさか、あの天憧十樹の実子ですか！？」

驚くのぉ小島先生。宇佐美は知っておったのか、それほどではないようじゃがの。

相変わらず裏の情報には聡い。

「まさかあの聖人に子供がいたとは……」

「あやつはそんな風に呼ばれるのを嫌っておったわい」

「そうなのですか？　しかしその名に恥じぬ功績を彼は残しています。世界各地での救援活動を初め、自ら紛争地帯に乗り込んで平定すること三度。少なくとも彼のお陰で数千人以上の人間が救われています。更に孤児院や戦災地域に億単位の金額を寄付したり、彼のした偉業を上げればキリがありません」

「あやつはただやりたいことをやっただけと言っておったがの」

「それ故に聖人などと言われたのでしょう。なるほど、天憧百八は彼の実子でしたか」

満足そうに頷く小島先生。ふむ、やけに熱が篭っておるの。

「十樹についてよく知っておるようじゃな」

「彼の姿勢は素晴らしいものでした。人を導くという点では誰よりも長けた偉人。私が心から尊敬する一人です」

「ならば当然、あの有名な事故は知っておろうな」

ワシのその言葉に、小島先生の眉が寄る。

「あの山火事ですか……。ですがあれは彼と彼が引き取った子供全員亡くなったと――なるほど、一人だけ生き残っていたと。それが天憧百八なのですね？」

「……そうじゃ、つい先日まで行方不明だったのは傷ついた心を癒すために療養しておった。今ようやく復帰できるようになったのじ

ゃ。見守ってくれるか？」

「もちろんです。前に進むために努力しているのなら教師として、支えないわけにはいきません。そうですね、宇佐美先生？」

「え？　あぁ勿論ですよ小島先生」

「期待していますよ」

「任せて下さい！」

「学長、話を聞かせて下さってありがとうございます。では私は入学式の準備があるのでこれで」

「うむ」

さて、そろそろ始業式の時間じゃの。ワシもそろそろ腰を上げるとするか。

「すいませーん」

ん、男子生徒かの？　何のようじゃと職員室の出入り口に立つ男子を見ると

「ぶほっ」

吹いてしまった。なぜおぬしがここにおる！　もしや……

「……百八」

「あれ、爺っ様？　っなんでそんな温かそうな目で僕を見るんですか？　まぁ春だし……春だと視線って温かいのか？　あれ、冬だと……アレ？」

「ボケておらんで、今日は入学式じゃぞ？」

「？　ええ、ですから来たのですけど。ああそうでした、僕の所属するクラスがなかったんです。僕、もしかして来る時間を違えましたか？」

違うの？　と首を傾げられる。むぅ、こうしてみると本当に美少女じゃのぉ。

見た目という雰囲気といい。清楚というか純粋なんじゃよなぁこやつ。モモが好きそうじゃわい。

これで男というから世の中おかしいわい。流石に男子生徒の服をきておるから分かるが、私服じゃと女にしか見えんからの。別に女物の服を着ておるわけでもないのに。

いつかブルマ穿かせてやろうかの……いや、ワシはなにを考えておるんじゃ？

見れば周りの先生も百八の言葉に呆けたような顔をしておるわい。

「あ～、君が天憧君かい？」

む？　宇佐美先生が珍しくピシリとした背筋で百八に話しかけおった。

小島先生が見ておるしの、良いとこ見せるチャンスじゃぞ。

「？　おじさんは？」

「おじッ！？　ん、コホン。オレは宇佐美巨人。君が転入するＳ組の担任だ」

「巨人？」

百八は宇佐美先生の上から下を見て、そして宇佐美先生の真上辺りの天上を見た。

……なんとなくあやつが考えている事が分かるのぉ。あれがワザとじゃなくて素というのが、またなんとも。

「今は小さいんですか？」

「……はい？」

「巨人なんでしょ？」

「いや、確かにオレは巨人だが」

「大きくならないんですか？　巨人なのに？」

「……おぉう、こういうヤツかよ」

宇佐美も理解したようじゃの。そうじゃよ、そういう奴なんじゃよ。

「え～っとな、俺は巨人って名前で、別に巨人族でもないんだよ」

「名前負けしてますね」

「おーう、オジサンもうダメかもわからんね」

爽やかに毒吐くのう。そんなつもりはないんじゃろうが。

「あ～それとな、今日は入学式で、君は来なくて良かったんだよ」

「なぜですか？」

「入学式ってのは一年生がするものなの。で、君の学年は二年。二年と三年は始業式に来るものなの、分かった」

「僕って学生一年生なんですけど、参加しちゃ駄目なんですか？」

百八が悲しそうに首を傾げる。……こやつ、女だったら無自覚で傾国の美女にでもなりそうじゃわい。

「……そりゃあ」

「……」

「……そ、そ、りゃぁ」

「……」

「……学園長」

宇佐美から助けてという目をむけられてしまったわい。

仕方ないの。まぁ、何事も体験させてやりたいし、少し変わった入学式を体験させてやろうかの。

「仕方ないのう。それでは」

「し、し、し、失礼します！」

む、なんじゃまた客か？　ん？　ほぉ、あの娘は……

「おぬし、黛十一段の娘じゃな？」

「はい！？　え、あ、はは、ははははい！」

「楽にしてよいぞ。今のわしはただの学園長じゃからのぉ」

「爺っ様爺っ様。それだと余計緊張するから。あと由紀江は凄い人見知りだから、これが素なんだよ」

「あ――――天憧さんがいました！？」

「え？　いるに決まっているでしょ。僕ここの生徒なんだから」

「そ、そうですよね……」

なんか忙しい娘じゃのう。

ふむ、しかし名前で呼ぶところを見ると……。

「おぬし、この娘と知り合いじゃったのか？」

「今朝、一緒に学園に来たんだよ。ね？」

「は、はは恐れながら！」

「ほら、可愛いでしょ？」

「～～～～ッ！？」

ぽんぽんと娘の頭を撫でる百八。

……人見知りの娘に、こういう場でそういう事を言うのはどうかと思うんじゃが。

天然とはかくも恐ろしいものなんじゃのぉ。

見てみい、ゆで蛸みたいになっておるぞ。

「それで、黛のは何しに来たのじゃ？　迷子……というわけでもなさそうじゃな」

「は、はい！　も、もも、もっ……天憧さんの、ですね！」

いちいち妙なアクセントをおくのぅこの娘。

「由紀江、僕の名前まだ言えないの？」

「百八、まゆっちはなぁ、一歩一歩着実に歩いていくタイプなんだぜぇ。お前みたいに二段飛ばしで名前呼び捨てとか普通ねぇよ、マジぱねぇよ」

……腹話術かの？

「じゃあ僕も黛って言ったほうがいいの？」

「いえ！　それはそのままでいいです！」

「……由紀江がきちんと喋ったの初めて聞いた」

「まゆっちはな～やれば出来る子なんだぜぇ～。惚れるなよぉ」

「惚れちゃ駄目なの？」

「～～～～ッ！？！？」

「お、おぉう、その切り返しは中々だぜ。さすがのオイラも致命傷、将を射るならまず馬だぜー……ガクリ」

「松風が死んだ！？　救急箱……いやこの場合工作箱か？」

「松風、松風ぇ！」

……仲良いのおぬし達。

「それで、夫婦漫才はおいとくしての……」

「夫婦漫才とかいってくれるじゃねぇかじーさんよ～」

「松風が生き返った！？」

「オイラ八百万の化身だからな～、あと七百九十九万九千九百九十九の命があるんだぜぇ～」

「最強じゃないか松風」

「赤兎馬にだって負けないぜぇ～」

「渇ッ！」

「「――――」」

「ふぅ、で。こやつがなんじゃったっけ？」

「あ……は、はい！　天憧さんのクラスがないって聞いたので、それを、そのえーと……」
「聞きに来たと」
「……はい」
「随分と好かれたのぉ」
「友達ですから」
「！」
こやつら見ておるとしょっぱいせんべい食べたくなるのじゃが……なんでかの。
「そもそもこやつは二年じゃぞ」
「……ほぇ？」
「天憧百八は二年生。じゃから本当なら入学式に来る必要などなかったんじゃ」
「え、でも、実際に来て……」
「それはこやつの勘違いじゃ。休みの日に学校があると思ってしまうのと同じようなもんじゃな」
「え、じゃあ、百八さんって……先輩、なん、ですか？」
「そうだよ」

「……」

む、黛が突然震えだしたぞい。

「あわわわわ、せ、せせせせんぱいに大して私はなななんてことを！」

「落ち着くんだまゆっち～、オイラの聞いていた感じタメ口使ってないからギリセーフだ」

「いえ、私の心の中では同学年だと思っていましたからそれを差し引いてギリギリアウトなのかもしれません……！」

「まゆっちは正直者だな～、こんな良い子そういないぜ、なぁ百八」

「そうだね、由紀江は可愛くて良い子だもんね」

「～～～～ッッ」

「やめるんだ百八ぁ～！　このままだとまゆっちのＭＰが０になって死んじまうぜぇ！」

こやつらもう本当にどっかで路上漫才でも始めてくれんかの。

「まぁそういうわけじゃ。なに、せっかく百八も来たんじゃ、悪いようにはせんて」

笑うワシに、きょとんとする二人。ふぉっふぉっ、おぬしには入学式三回分の経験をさせてやるわい。

5・・・入学式『由紀江フレンド・中』（後書き）

うん、なんかノッてノッたらこんなの出来た。
呼び方違うとか、キャラ違うとかう、なんかあったら指摘お願い。

6・・・入学式『由紀江フレンド・下?』（前書き）

一人称継続中。いや一人称書いてて楽しいな。文字もすぐ埋まるし会話させやすい。
三人称も書いてると愉快なんだが、悩みどころやね。
みんなどっちがいいかな？
前回に比べて文字少なめ。そしてそろそろ原作へ突入。

6・・・入学式『由紀江フレンド・下?』

「――と、まぁワシからは以上じゃ」

爺っ様がそう締めくくり、入学式の終わりはもうすぐそこだ。

後は教室に戻って、各自これからのことを話して終わりらしい。

できたら由紀江のクラスに付いていって参加したいが、流石にそれはと止められた。

別にいいと思うんだけどなぁ、気配消せば。

ちなみに僕は現在、一年生の列でも教師陣の隣でもなく、爺っ様の左隣に立っていたりする。

右隣にはルー師範代。

入学式が始まってから一年生達がずっと不思議そうな目でこちらを見ていた。

まぁそうだよね、制服着ている生徒が学長の隣に立っているんだもん。

しかしもう入学式が終わってどうでもよくなったのか、こちらに注目しているものはやけに強張った顔をした由紀江ともう一人、なんか気の強そうな小柄な女の子だ。そしてなぜか制服ではなく体操着を着ている。

（なるほど……）

あれがブルマか。

うん、爺っ様はブルマ最高、と言っていた理由が分かった。

素晴らしいなブルマ。

由紀江に頼んだら穿いてくれるかなブルマ。きっと大丈夫だブルマ。

「（ブルマっていいですね）」

「（そうじゃろう？）」

爺っ様がおちゃめにウィンクしてきた。

ルー師範代は露骨に眉を寄せたけど。

しかし爺っ様嬉しそうだな。いつもはこの弛んだ一年の空気が好きではないと眉を顰めていたらしいが、今回は違う。

むしろその反応こそ欲しかったらしい。

……だから爺っ様の昔話なんかが始まったのか。あれが始まってからみんなぐだーっとし始めたからね。

クマをデコピンで吹き飛ばしたなんてところでみんな白けてた。

その反応に逆に驚く。

信じてないの？　爺っ様なら指どころか一喝で吹き飛ばせるのに。

「――じゃが今回はちと催しがあってのう」

え？　と一年にざわめきが生まれる。

聞いていない、そんな話は聞いていない。催し？　何が始まるんだ？

そんな声と気配に爺っ様はますます気をよくし、言った。一年全員に通る声で。

「デモンストレーションじゃ！」

一年生は綺麗な列が今は綺麗な円を描いている。

周囲にはそれ以上の立ち入りを禁止するように先生達が一定間隔で立っている。

そして一年が囲った円の中には、僕とルー師範代と爺っ様の三名だ。

「由紀江は……」

いた。目が合った。なんか凄いハラハラしてる。

忙しない子だなぁ、それが可愛いんだけど。

職員室で一緒に話を聞いていたのに不安なのかな？

手を振ってもいいんだけど、どうしよう、したらまたテンパりそうだから、とりあえず笑っておこう。

にこり。

ってしたら、なぜか由紀江じゃなくて周囲がざわめいた。

そして当の笑いかけた本人はというと……。

ギン！

睨まれた。しかもひくついた笑みを浮かべて。

「……むぅ、怒ったのかな？」

別に特定してやったわけじゃないから、目立たないと思ったんだけど……

「これより！　川神学園伝統、決闘の儀！　……のデモンストレーションを執り行う！」

あ、そろそろか。僕も準備しないと。

「お前らも知っておるじゃろうが、ウチは伝統行事として決闘システムを採用しておる。
これより始めるのはそれを実際に見て知ってもらうおうというワシの粋な計らいじゃな。惚れてもいいぞい？
……コホン。お前達には奪い取る快感を、勝ち取る栄光の味を、これを通じて覚えてくれると嬉しいのぉ」

「……」

奪い取り、勝ち取る。

僕がこうして生き残っているのも、この言葉通りなんだろう。

？奪い勝ち取れ。その時こそお前達の願いは叶うだろう？

父さんの言葉が反響する。

思えばあれから歯車が狂いだしたのかもしれない。

……いや、違うか。歯車は最初から狂っていた。

「二人とも前に出て、お互いに名乗りなさい！」

爺っ様の声に我に帰る。

「川神学園体育教師　兼　川神院師範代、ルー・イー！」

ルー師範代の名乗りに一年生達がざわめきだした。

流石師範代の肩書きは伊達じゃない。

さて、僕も。

「川神学園2年S組、天憧百八！」

「先輩がんばれー！」
「きゃーきゃーきゃー！」
「怪我すんなよセンプァーイ！」
「ていうか、あの人男？　女？　どっち？」
「え、女だろ」
「いや制服からして男だろ」
「男装かもしれん……」
「ありえるな」
「胸が熱くなるな……写メとっとこ」

「おぉう……」

いきなり応援されて驚く。あと……なんか凄い寒気した。

風邪？　体調には気をつけているつもりなんだけど。

「ワシが立ち合いの元、決闘を許可する。勝負が付くまでは何があっても止めぬ。
しかし勝負がついたにも関わらず、手を出そうとしたならばワシが介入させてもらう。
――良いな？」

「承りましタ！」

「了解しました」

向かい合う。

ルー師範代は嬉しそうに笑っている。

一度も稽古したことなかったから、僕の相手が出来て嬉しいのかな？

……僕もですよ。

「まさか君とこうして試合うとはネー」

「そうですね。僕も決闘システムの事は聞いていましたが、一番早く体験できるとは思っていませんでした」

「まさか君とこうして試合うとはネー」

「そうですね。僕も決闘システムの事は聞いていましたが、一番早く体験できるとは思っていませんでした」

「不服かイ？」

「至福ですよ」

「ではやれるかナ？」

「勿論やれますとも」

「そうこなくてハ」

「ええ全く」

これで色々と目立つことになるだろうけど……まぁ構うまい。

ルー師範代は百姉ぇクラスの達人中の達人。

これで自分の力量がどの程度か分かる。

この人に、僕の力がどこまで届くか……

いずれ決着は付けなきゃいけない。

その時こそ己の総決算。

約束を守り、誓いを果たし、呪いを解く。

後は野となれ山となれ。

ただ、その時までは――

「いざ尋常に……」

川神学園。

来て良かった。

少し遅くなったけど、ありがとう爺っ様。

ありがとうルー師範代。

この学園に来て本当に良かったです。

地獄の心象風景。腹の中で渦巻く灼熱。

それらは全て、今は遠い。

？[redacted]？

あぁ分かっている。

一人じゃないさ、共にいる。

約束は果たす。

誓いは守る。

無念は必ず成就させる。

だから行こう、共に進もう。

勇往邁進。

あらゆる困難も踏破して、共に目指そう。

あの遠い遠い頂きまで。

「……門解錠」

それは魔法の言葉。呟きと同時に膨れ上がる気。

それをやる気と見てくれたのか、ルー師範代が更に嬉しそうに笑ってくれた。

「はじめぃっ！！！！！！！！！」

万感の思いを籠めて踏み込む。

一歩。

ルー師範代へと近づく一歩であり、悲願を成就させるために踏み出した一歩。

「来なさイ！」

「参ります！」

迫る。

早い。

もう至近距離。

そしてお互い、示し合わしたかのように拳と拳が激突して――

6・・・入学式『由紀江フレンド・下?』（後書き）

次はマユッチ視点からお送りします。

7・・・入学式『由紀江フレンド・下?』（前書き）

マユマユは至高のヒロイン。異論は認めない。しかし異議は認める。
本当は１０００字だけだったのに、なぜか増えた。三倍に。
知りません。違います。勝手に増えたんです。文字がアメーバ化したんです。
おのれウィルス（違います

7・・・入学式『由紀江フレンド・下?』

デモンスレーション。

川神鉄心が言った言葉を理解していない一年生達は、首を傾げながらも担任の指示に従い、グランドの中心を囲むように円を描いていた。

その円の中には当然、彼女――黛由紀江が立っていた。

（百八さん……）

心の中で呟くのは今、グランドの中心に立っている白い先輩の名前。

彼と川神院師範と師範代は一年生で構成された輪の中に立っていた。

勘の良いものならこれから何が起こるか気づいているようだ。

ある者はありえない者を見るような目で。

ある者は何が起こるかわからぬまま中心に立つ三人を見て。

ある者は……なぜか百八に熱い視線を向けていた。というかこれは女子が大半で、中には男子もチラホラと。

その視線に何故か胸の中で黒いもやもやが生まれるが、そのもや

もやが何なのかを考える余裕はない。

「大丈夫、なんでしょうか」

「さぁな、こればかりはオイラも分からないぜぇ……」

いつもマイペースでフルスイングな松風の声もこの時ばかりは沈んでいた。

原因はこれから行われるデモンストレーション。

その詳細を聞いて由紀江は反対した。怪我をしたらどうするんですか！　と。

ただし心の中で。

鉄心は怪我させぬと断言され、ルーもまた同様。

肝心の百八も乗り気だったから、彼女は何も言えず、親切にしてくれた先輩の身の安全を願うことしか出来ない。

いくらかの川神院師範と師範代でも、万が一というのがある。

もしその万が一が起こってしまったら……そう思うと由紀江は居ても立ってもいられず……かといってどうしようもなく、ただ父から受け継いだ宝の刀を強く握り締めることしかできなかった。

無力だ。

考え過ぎなのかもしれない。

でも。それでも。

？友達だから？

そう、言ってくれた人が、危ない目になんて会って欲しくなかった。

職員室でさりげなく言ってくれたその言葉。

どんなに頑張っても。

どんなに練習しても。

決して手に入らなかったその言葉と――その意味。

由紀江にとって、その言葉がどれほどの宝石だったのか、きっと百八は知らないだろう。

？由紀江の上達ぶりは素晴らしいな？

?この年でこれほどの剣を扱える者は私は知りませんよ？

どれだけ剣の腕を磨いても。

一人ぼっちだった。

?流石黛十一段の娘？

?天才だ、剣聖の名を継ぐに相応しい？

大人はみんな褒めてくれるけど。

……一人ぼっちだった。

?一本！　勝者　黛由紀江！？

?また黛の勝ちか～？

?つか俺らやる意味なくね？？

どんな相手にだって勝てたけど。

――独り、ぼっちだったのだ。

友達が出来ない。

一生懸命松風と練習して、一生懸命実践しても……みんな、気味悪がるように離れていく。

頑張っても。

頑張っても頑張っても頑張っても。

一人も友達は出来ずにただ独り……

一度だけ、挫けそうになった。

そんな折に父が言ったのだ。

川神学園に言ってはどうかと。川神学園は他の学校とは異色だ。

きっと由紀江でも友達が出来るだろうと言ってくれた。

その言葉が、挫けそうになった由紀江を再び立たせた。

地元ではもう友達を作れない。

そう思って、そう諦めて、一念発揮して川神学園に通う事を決めたのだ。

でも不安だった。

ここでも友達が出来るのか？

出来ます！　必ず百人作ってみせます！

本当に？

前のように気味悪がられて否定されて、もう友達なんて一生できず、夫も出来ず世継ぎも出来ず、自分の代で黛家を断絶させてしまうんじゃないか？

……最後辺りは妄想の飛躍し過ぎかもしれないが、由紀江にとっては笑い事ではなかった。本当に、本当に、死活問題だったのだ。

ここで駄目なら後はない。

死地に赴く心構えで、川神市に越してきた。

今日も朝早く出たのも、みんなの印象を良くしようと思っての行動だった。

走りながら松風と会議をしていたら前の人に気づかず、ぶつかってこけそうになった。

一瞬動転。

けれど日々の鍛錬から身に付いた体が咄嗟に後ろ周り受身をしようとした所で腕を取られ、突然抱きしめられた。

訳が分からず顔を上げて――上がり症の事も忘れて、見惚れた。

白くて綺麗な人だった。

白い髪に白い眼帯をした麗人。

そして抱きしめられていると気づいたらもうテンパって慌ててあたふたと。

警察に一緒に連れて行かれる途中、松風を紹介した。

自分ではまともに喋れなかったから、松風に代理で挨拶してもらった。

警官は怪訝な顔をされた。

そうだろう、認めたくないけど、自分がやっていることはそういう類の目で見られても仕方がない。

でも自分では、どうしても上手く話せないのだ。

だからこの人もそんな目をするのかと恐る恐る伺うと。

？へぇ、松風っていうんだ。カッコいい馬だね？

なんて。

そんな。

そんな、変な目なんて、なくて。

そんな、風に言われて。

正直……泣きそうになった。

警官の方に確認してもらって、別の警官の方が学園まで案内すると言ってくれたけど断って、途中で先に行ってもらった。

もう我慢できなかったから。

?ま、松風、松風……?

?お…おおぅ、どうしたまゆっちー。オラ、カッコいいなんて言われちゃったぜー。それに変な目じゃなくてもう、オラ、もう、私……私……ッ?

泣いた。少しだけ。

馬鹿にされなかった。

変な目じゃなくて、それどころかカッコいいなんていわれて……

受け入れられた。

それだけで、もう嬉しくて嬉しくて、よく分からなくてポロポロ泣いた。

そうして一通り泣き終わって、あの人を待つことにした。

?あ、はい。報告してからもう一度ここまで来ました?

嘘です。貴方を待っていました。貴方ともっと話がしたかったんです。

なんて言えないから。そんな風に言って誤魔化した。

学園にいくまでの時間は楽しかった。

もっと遠ければいいのに、１００ｋｍくらい。

でも距離は意外と近くて。

?もも……天憧さんはどのクラスなんですか?

自分は１－Ｃだった。彼も同じだったら、そう思って聞いたら。

?ん？　僕のクラスはここにはないよ？？

……

……

……

は？

一瞬何を言われたのか分からなかった。

クラスがない？　そんな事ないだろう、ここには全クラスが揃っているのに、ない？

ということは……。

この人は、川神学園の生徒じゃない……？

――今思えばなんて恥ずかしい勘違い。

彼は川神学園の制服を着ていたし、その言葉から推測するなら、

あの時出会った入学式案内係の一人かと簡単に想像できただろうに。

でもあの時はそんな余裕がなくて、

そんな……

この人とは一緒にいられないの？

離れてしまうの？

……。

……嫌。

それは嫌だ！

やっと友達になってくれるかもしれない人が出来たのに、こんな所でお別れなんて！

嫌な想像から戻って来た時にはもう彼の姿なんてどこになかった。

いなくなった。もう会えない。二度と。

そう思ったら凄く怖くて、悲しくて、だから意を決して職員室に乗り込んだ。

なんで乗り込んだのか、もう覚えてない。

もしかしたらあの人をこの学園に入れてください！

なんて、おかしな事を言おうとしたのかもしれない。

結局、そんな事しなくても彼は居たけれど。

そして初めてそこで、彼が先輩だと知って驚いた。

職員室で、彼――百八先輩と色々話した。

?ほら、可愛いでしょ??

そんな言葉、家族以外から言われた事なんてなかったからどうしていいか分からなくて。

?惚れちゃ駄目なの??

なんでそんな事言うのか、驚いて子供の名前とか考えてしまった。

そして言ってくれた絶対に忘れられない言葉。

？友達だから？

そんな、私の大切な人が、決闘をする。

相手は、あの川神院師範代。

怖い。

なくてしまうんじゃないかって。

せっかく出来た友達を。

大丈夫、とは言ってくれたけど。

でも私には見ていることしかできないから。

だから、ずっと無事に済みますようにと願いながら、あの人を——百八先輩を見ていた。

したら目が合って、笑いかけられた。

まるで、心配するなって言ってくれるみたいに。

その綺麗な笑顔に見惚れていたら、突然周囲のみんなが湧き出して。

「ちょ、見た！　こっち見て笑ってくれたわよ……！」

「違うわよ！　私よ、私！」

「きゃー！」

「あの人誰！？　イケメン四天王にあの人載ってなかったのに！」

「彼女いるのかな？」

「そりゃいるでしょー居なかったら私が立候補するけど」

胸の中にあった黒いもやもやが大きくなる。訳が分からないけどムカムカした。

「……おまえら勘違いするんじゃねぇよー。百八はなぁ、まゆっちに笑いかけたんだぜー」

なんて。

松風が言ってくれたり。

声も小さくて誰も聞いていなかったけど。

とにかくお礼に精一杯の笑顔を浮かべた……のだけど、やっぱり、変な笑顔になってしまった。

先輩、目を丸くしてる。

――ごめんなさい。私、ろくに応援も出来ない駄目な子なんです。

いじけていると、ルー師範代と先輩が名乗りをあげる。

みんなの声援に、私も声を出そうとしたけど駄目だった。

パクパクと。水を求める魚みたいに、口を動かすことしかできなかった。

「はじめぃっ！！！！！！！！！」

開始の合図と共に踏み込む二人。

どちらも速い。

一瞬にして至近距離。

お互い、まるで鏡合わせのように拳を繰り出して――

そして――私は、その時見た光景を、絶対に忘れません。

父上。

私、今日は書くことたくさんあります。

十枚……いえ、百枚くらい書くかもしれません。

父上。

私、友達が出来ました。初めての友達が。

そして、私にとって――大切な……

7・・・入学式『由紀江フレンド・下?』（後書き）

正直に言おう。

感想が……欲しいんです……！

さてマユマユってもっと控えめだったっけ？
友達に飢えてたらこんくらいな気がする。
修正点があったら教えてくれ。みんなの理想のマユマユを書くから。
そしてただでさえ訳の分からん死亡フラグが立っている主人公に、
新たなフラグが経ちました。
その名も『貴様にワシの娘はやれん』フラグ
黛十一段のことだから、居合切りでズパッと行きそうだね。
真剣白羽どりしたら認めてくれそうだけど。百代も出来ないよねきっと。
さて、次の主役はみんな大好き次回作の新ヒロイン不死川心です。

サブタイトルは『始業式・心コネクト』

8・・・始業式『心コネクト』？（前書き）

心コネクトは、作者が書いてる中でも現状一番好きな作品
上中下じゃなく五話構成なので、数字でいこうかなこれから

8・・・始業式『心コネクト』？

さて前回は百八の勘違いで色々とあった入学式。

そして今回こそは始業式。

当然百八が転入する二年生も、その上の三年生もきちんと来ている。

今回、カメラを当てる場面は二か所。まずは２－Ｆ。

「なぁおい聞いたか～、今日転入生が来るんだってよ」

「なに？」

教室に入って来るなりそんな事を口にしたヨンパチに、誰よりも早く食いついたのは２－Ｆが誇る軍師、直江大和だ。

そんな話は知らなかった。

様々な人脈持ち、誰よりも多くの情報を得ていなければならない彼が、転入生、なんて重大な事を知らなかったのは相当な痛手であり、また興味深い話であった。

「ヨンパチ、それは本当か？」

「え、なんだよ大和も知らなかったのかぁ～。教えてやろうか？」

「ああ頼む、それで？　どんな奴なんだ？」

そんな大和の『知らなかった』発現と、転入生と言う大きな話題のネタが、２－Ｆの関心を一気に引いた。

皆が大和の近くに集まって来る。

……情報源であるヨンパチの元に集まらないのは、人望か。

「……（つーん）」

またその輪に加わろうとしない者も一人いたりしたが、それでも全員が耳を傾けていた。

「女か？　美人か？　胸とかどうだった！？」

「男？　イケメン？　お金もってそうだった」

特に食いついてきたのは岳人と千花だ。

お互い異性に飢えているのか、大和にぐいぐいと目を輝かせて迫る。

「いや、情報持ってるのは俺じゃなくてヨンパチなんだけど」

「おっとそうだった、おいヨンパチぃ。女か？　美人か？　胸とかどうだった！？」

「おいおい焦るなって。ちゃぁんと教えてやっからさー」

「勿体ぶってねーでさっさと言えよー」

「そうよそうよ」

「んっとな。……ぶっちゃけ、よく分かんねぇ」

……。

はぁ？

クラス全員がそんな目でヨンパチを見た。

まだ勿体ぶるつもりかよと、幾人か不機嫌そうに眉を顰めるが、当の本人は慌ててそれを否定した。

「別に勿体ぶるってわけじゃねーよ！　ただ……なんつぅか見た目で判別出来なかったっていうか」

「？　どゆこった」

「あーもう写真見せた方が手っとり早いか」

そう言ってカメラを起動させ、ホラと岳人に渡す。

「おうサンキュー。どれどれって……うぉぉ」

「ちょっとアンタ、自分だけ見てないでもう少し降ろしなさいよ！
見えないでしょうが！」

「わーったよ、ったく、うるせぇなぁ。大和。お前が見てくれ」

ホラよ、と若干投げ割にカメラを受け取り、大和はそこに映った人物を見て、は？　と目を開いた。

そこには白い眼帯をした白髪の人物。かつて入学式で出会った旅行に行くような量の荷物を持っていた一年生だったからだ。

「ナオッち見せ……って、うっわ綺麗……こりゃサルがどっちか分からないっていうのも納得ね」

「おいおいなんだこの髪。それに眼帯とか、どこの邪気眼だっての」

「ちょっとー私にも見せてよー！　ちょっと岳人邪魔よー！」

「でもこの人、なんで制服じゃなくて着物着てるんだろう……」

そう。

ヨンパチが男女どちらか分からなかったのは、写真の人物が着ている服が制服ではなく、白い流し着だったからだ。

胸にはサラシのように白い包帯が巻かれているため、見た目からしてやや女性寄りである。

「生徒じゃなくて、学校の関係者とか？」

大和がヨンパチに質問する。

「いいや、話してみたけど生徒だって言ってたぜ。間違いねぇよ」

「え、なにアンタこんな綺麗な人と話したの？　うっわサルの癖に生意気……」

「うっせ！　ん～でも、マジで出来た人だったぜー。俺の質問にはちゃんと答えてくれたし、写真撮っていいですかって言ったら即OKで、最後は握手までしてもらってよー」

「どこのアイドルファンだお前」

「話したんなら声の感じとかで分かるだろ？　そこんところどうなのよ？」

「あ～……いや、声も中性的で男なのか女なのかマジで分からねぇ」

「性別聞かなかったのか？」

「オニ小島と学園長と話してたんだぜ？　んな事聞けるかよ」

「おじいちゃんと？」

「てことは、川神院関係？　ワン子知ってる？」

「だから見せなさいって……ん？　川神院から誰かくるなんて聞いてないわよ？」

「ふーん。まぁ、小島先生と話していたって事は、うちのクラスな

んだろ？　その時聞けばいいんじゃないか？」

「それもそうねー」

「よっし、賭けだ賭けだ」

「ただいまのオッズはぁ～　女６～：男４～」

わいわいわい。

そんな風に騒ぎ出す２－Ｆに、ヨンパチは出し忘れていた最後の情報を開示した。

「あ、ちなみにそいつ２－Ｓだから」

沈黙。次いで、

「「「はあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」

爆音のような、大きな声が学園に響き渡った。

では所かわって、その転入生が転入してくる２－Ｓはどうだろうか。

「へぇ、転校生ねぇ」

２－Ｆから漏れてくる騒音のような声に答えたのは井上準。

禿だ。

「いや添っているだけだから！」

失礼、ハゲまみた。

彼は２－Ｓのツッコミ役。２－Ｓの苦労人。２－Ｓの犯罪予備軍と名高いハゲである。

「待て！　地の文に悪意を感じる！」

まぁそんな彼――準が出した転入生という話題を拾ったのは学年成績一位の葵冬馬だ。

「噂では転入テストでオール満点をたたき出したらしいですよ」

「え、まじか？　そりゃ凄ぇ。そういう事が出来るのって、おにーさんは若くらしか知らないぞ」

「僕でも流石に全て満点というのは些か難しいですよ。まぁ競い合える相手が出来た事を今は喜びましょう」

「若はいつも通りだねぇ」

「ハゲもいつもどおりだねー♪」

ポンポンとハゲの頭を叩くのは白髪の少女、榊原小雪。

ハゲの頭を叩くのがそんなに楽しいのか、あははーと笑いながら叩いている。

「コラ！　人の頭を叩いちゃいけません！」

「？　準の頭って人の頭なの？」

「異星人になった覚えはないぞ」

「あはは、何言ってるの～？　ロリコンなんてみんな異星人じゃん」

「ただ小さい子供が大好きなだけだから！　……ったく。でもよ、S組の枠はもう埋まってるんじゃなかったか？」

「木田という生徒を覚えていますか？」

「木田？　あーいたかもなーそんなやつ」

「彼がS落ちしましてね、その枠を埋めたらしいですよ。それに転入テストで満点を取るような人ですし、枠がなくても無理やり作ったかもしれません」

学年総合順位が五十位以下にまで落ち込んだ生徒は、S組の在籍資格を失う。それが俗に言うS落ちである。

「つまり若レベルの来るってことか？　うわぁ、勘弁。これ以上2ーSの濃度上げてどうすんだよ」

「準は影も頭も薄いからねー」

「そういうことといっちゃいけません！」

ふふふ、と不敵な笑みを浮かべる冬馬に、微笑ましいやりとりをする二人。

そんな三人にフハハハハ！　と笑いながら割りこんできた男が一人。

九鬼英雄。奇人変人が多い川神学園の中でも、突出した変人とは彼のこと。

没個性で埋まりつつある現代日本に生まれた暑苦しい煌めき。唯我独尊を地でいく九鬼財閥の御曹司。

「２－Ｓに相応しい者が来るのは我とて喜ばしい。せいぜい庶民同志で競い合ってもらおうではないか！」

「はい！　英雄様☆」

合いの手を打ったのはメイド服の女性、忍足あずみ。

九鬼英雄に仕える専属メイドにして２－Ｓの一人だ。

「ふふふ、英雄は相変わらずですね……おや、不死川さん、どうしたのですか？　なにやら不機嫌そうな顔をしておりますが」

そして会話を広げる彼らとは離れて、同じく２－Ｓを代表する一人の少女は、えっらく不機嫌そうな顔をして席に座っていた。

不死川心。

桜色の着物を来た彼女は名門不死川家の御息女であり、その凄まじい権力故に制服ではなく着物での登校を許されている。

つねに高慢、あり得ない程の利己主義と選民思想を持つ彼女なら、新しく入って来る転入生に対し、見下したような感想を吐いても不思議ではない――というか吐かないのが不思議だ。

そんな彼女は冬馬を一瞥し、ぷいと明後日の方に目を向けた。

「……おぬしには関係ない話じゃ」

「……？」

今までにない反応に内心首を傾げる冬馬。

「ともかく、どんな人物か楽しみですね」

「面白い人だといいねー」

「おにーさん的にはスポンジのような人が欲しいな、緩衝材的な」

「どんな庶民であろうと、我は受け入れよう！」

「はい☆　……くっそうぜぇ。また厄介事が増えそうだぜ」

「……ふん」

そんな彼ら彼女六人が、このS組の中心ともいえる人物達である。

「おまえらいるかーいないやつは返事しろーよーしいないな」

そうして予鈴がなり、本鈴がなったところで担任教師である宇佐美巨人がやる気のない挨拶をしながら入室してきた。

同時に談笑の声が一気に治まる。

特進クラスＳ組。

どんなに濃い変人奇人がいようが、その根っこは選別された優等生（エリート）だ。

規律を破るような真似はしない。

「ひげー挨拶はいいからはやく転入生がみたいー」

……。

まぁ。

たまにそんなの関係ねぇ！　という奇人もいるが。

おおむね、優等生ばかりのＳ組である。

「あいよ。ま、耳の早い奴はもう知っているだろうが、今日からうちに新しい仲間が来る。ふっふっふっ、仲良くしろよ」

「「「……？」」」

Ｓ組の生徒達は一様に首を傾げた。

なにやらヒゲこと宇佐美巨人が珍しく機嫌が好いのである。
いつもだる～としたロマンスグレーは、ほんの少しだが活力に満ちていたのだ。
「何かいいことあったのか？」
そんな質問をする生徒に、巨人はまぁなと笑った。
「井上、お前にとっても嬉しい事だと思うぞ」
「は、オレか？」
突然指名されて驚く準。
彼が喜ぶと言ったら小さい女の子が来るのか？　と誰もが思ったが、巨人はそんな趣味ではないのは周知の事実。
では巨人も井上も喜ぶ人物とはなんだ？
そんな疑問に埋め尽くされるＳ組の生徒達。
そんな中で、終始不機嫌そうな顔を崩さない人物が唯一人。
「……ふん」
ぷいっ。

不機嫌、というよりも拗ねている感じであった。

「ま、いきなりじゃ分からないだろうな。後々分かるだろうさ、よし噂の転入生入れー」

巨人の許可と共にS組の教室の扉が静かに開いた。

自分達の担任の言葉に疑問を抱き、それが全て好奇心に変換されて全員が扉を見る。

そして入ってきたのは……

「……うわ、白い」

誰かが声を漏らした。

白い。

白い髪に白い眼帯。制服ではなく白い流し着に白い帯。

そして僅かに見える胸板にはサラシのように白い包帯が巻かれており、一見女性とも男性とも言い難い顔つきの生徒である。

「おーすげぇ真っ白。これってもしかしてユキの兄弟なんじゃねぇ――」

か？

軽口を叩こうと小雪に視線を向けた準の声が止まる。

「……ユキ？」

冬馬が珍しく怪訝な声を上げた。

「――――」

小雪は、固まっていた。

いつも眠たげな半眼が大きく開き、小さな口を開けて。

彼女らしくない。

榊原小雪を知る生徒はそう思うだろう。

そして彼女を誰よりも深く、その歪さを理解している準と冬馬か

らすれば？らしくない？どころか？ありえない？という感想だ。

彼女はきっと、例え世界が滅んでも自分達二人が無事ならば、今と変わらぬ壊れた笑みを浮かべている。

確信ともいえる信頼を、その歪さに見出していた。

だからこそ、その反応がありえない。そう思ったのだ。

冬馬と準は驚きをそのままに、入ってきた転入生に目を向けて――その目を見て、

（（――ああ））

二人は納得した。

常人では――いいや、きっと一流の武人でも理解出来ないだろう。

その右目に灯る色を。

二人だから分かる。

榊原小雪と言う壊れた少女と長くを共にいた彼らだからこそ。

二人だから解る。

あの少年が、榊原小雪とは近い人間なのだと。

しかし所詮、彼の事情も、また武の心得も大してない二人では、表面部分しか感じ取る事は叶わない。

しかし分かった、理解した。

どういう人間なのかを。

そして小雪は、壊れているからこそ、二人よりも深く何かを、転入生に感じたのだろう。

「僕の名前は天憧百八。若輩者ですが、皆さんの足を引かぬよう、誠心誠意努力していきたいと思います」

ほがらかにペコリと一礼。その柔らかさはS組には到底似合わぬ気質だ。

そんな転入生を見て、冬馬は笑った。口元を、ほんの少しだけ歪めて。

「皆さん。これから宜しくお願いします」

8・・・始業式『心コネクト』？（後書き）

とりまえず小雪の反応は他の作品とは一風変わったものかもしれない。
原作ばかりで、他の作品とかあんまり見てないからだけども。
おススメあったら言って。参考にしたい、色々と。

9・・・始業式『心コネクト』？（前書き）

さて、色々気になる反応が出ますよ。特に電波な子とか。

9・・・始業式『心コネクト』？

どうしてこうなった？

その疑問が頭から離れず、百八はいつぞやの入学式の時のように、いやそれ以上の生徒に囲まれてグランドの中心に立っていた。

奇しくも立っている場所もまた同じく。ただ相手だけが違う。

「不死川さん、どうしてもやらなきゃいけないの？」

「……」

静かに憤慨した様子で対面しているのは桜色の着物を纏った少女、不死川心。

百八の質問には口で応えず、これが答えだといわんばかりにギッと鋭い視線を向ける。

分からない。なぜ睨まれるのか。

（そういえば、入学式の時も由紀江に睨まれたな）

なんて思い返して。

周囲から彼女の気を探り出す。

その途中、やけに馬鹿でかい気を感じ取り、あぁ遂に……とそちらに目をやった。

そこには一纏まりになった一団。男子三名と女子二名の中に、彼女はいた。

ニヤニヤと戦いを楽しむように笑っているのは――川神百代。

ズキリと額が痛む。気にはしない。痛みには慣れた。

話せるかは――分からないけど。

そういえば、彼女は覚えているだろうか。

かつて冬の空で出会った事を。

小さい頃にまた、一緒に折り紙をしようという約束を。

覚えていたら嬉しいし、忘れているならそれはそれで仕方がない。

彼女にとって自分は何気ない日常に落ちていた一コマ。

でも百八にとっては掛け替えのない一コマ。

ふと視線が合った。強まる頭痛。慌てて視線を切り、当初探していた気を探す。

居た。そちらに振り返ると、かつてのように強張った笑みを浮かべている可愛い後輩。

思わず微笑む。緊張しているんだなぁと。

そして彼女の周囲から黄色い声援が湧き出した。

対面している相手が、更に憤慨オーラを放っていると気づかずに。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！」

鉄心の宣言に、騒がしかったギャラリーが更に加速。

雑音のような声援に、一瞬灼熱の地獄を思い出す。

（……違う）

あれは絶叫。

こちらは声援。

間違えるな天憧百八。

ここは学園のグランド。

決して山奥の炎ではない。

あぁでも、炎という意味では似つかわしい。

この大きな声援は、まるで焼けるような熱気に包まれているから。

「両者揃ったの。ルール確認じゃが、内容は武器を用いぬ格闘戦。わしが戦闘不能と判断、もしくは参ったとどちらかが言った時点で勝敗を決する」

念を押された確認に頷く。

「では二人とも、前へ出て名乗りを上げるが良い！」

「２－Ｓ、高貴なる不死川心じゃ。無知蒙昧なそなたに、此方の名

を敗北と共に叩きつけてくれよう！」

ワーッ声援が強まる。でもどうしてか、そこには応援というよりも罵声の色が濃い。

特にあの２－Ｆとかいうクラスからはそれが顕著だ。

「本日より転入した、同じく２－Ｓ。天憧百八」

そしてかつてのように沸き立つ黄色い声援。

なぜこうも応援されるのだろうと内心首を傾げながら構える。

「ワシが立会いのもと、決闘を許可する。
勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。
じゃが、勝負がついたにも拘らず攻撃を行おうとしたら、ワシが介入させてもらう。
良いな？」

「構わぬ」

「了解しました」

「うむ――ではいざ尋常に」

お互い奇しくも素手同士。

故に簡単。故に単純。ただ真っ向勝負の打ち合い。

「始めぃぃッ！！！！！」

かつてのように一歩を踏み込む。彼女もまた同様に。

お互い距離を詰めながら、そもそも何故このようなことになったのか、百八は思考の隅で思い返す。

それは三十分ほど前の事。

「此方は、そなたに決闘を申し込む！」

彼女がそんな事を言う切欠は、なんだったのだろうと思い出そうとして。

ＨＲが終わった。途端、教室が賑やかになった。

百八はそれを見渡して、思わず「へー」と声を漏らす。

学校、というものに無縁だった彼にとって、そんなどうでもいい一コマさえ新鮮で、楽しいモノだった。

皆が談笑し合い、時折こちらを見て来るのが分かった。

目が会う度にこれから宜しくと意味を籠めて笑うと、何故か赤面されて目を逸らさせた。

「……？」

誰とも会話せずに座っていると、ふと肩を叩かれて後ろを振り返る。

そこに立っているのは白髪に赤目の少女、小雪だ。

今の彼女にはいつも浮かべているような壊れた笑みはなく、無表情でずずいとマシュマロを一つ突き出していた。

「……えっと？」

首を傾げる百八に、小雪はさらにずずいとマシュマロを付きだす。

手を伸ばすと、ビクンと反応されて突き出されたマシュマロがさっと遠のく。

「……」

「……」

まるで野良犬に餌をあげようとする子供のような反応に、どうしたらいいか分からず「助けて」と周囲に救難信号を発信。

しかし周囲は救いの手を差し伸べることもなく、興味深そうに百八を――ひいては小雪らしくない表情と行動に、驚きながらも興味

深く見守っている。

ずずい。

さっ。

ずずい。

さっ。

「……」

「……」

そしてずずい。

突き出されるマシュマロ。

目と鼻の先にあるのだが、受け取ろうとすると逃げられる。

「……」

「……」

ぱく。

「あ」

っと声を上げたのは当の小雪。

食いつかれた。マシュマロを摘まんだ白い指ごと。

そして遂に取られるマシュマロと、ついでにペロリと舐められた白い指。

「美味しかったよ、ごちそうさま」

「――――」

百八の礼に、しかし小雪は答えない。

百八の口を見て、舐め取られた指を見てと交互に見返して――。

ダッと。

逃げた。

脱兎の如く。

「あ、コラちょっとユキ待ちなさい！」

「おやおや、ユキにしては珍しい行動ですね」

逃げた小雪を追うように席を立ち上がる準と冬馬。

冬馬は一度だけ百八に探るような視線を向けた後、すぐに切って小雪と準の後を追った。

Ｓ組の生徒達はやはり彼女の行動を不思議に思いながらも、不思議の代名詞であることを思えば、まぁ小雪だしと納得して、各々興味対象である百八に話しかけた。

個性的で、それ故に我が強いＳ組には似合わないその柔らかさ。

けれど相応しい実力を持った百八。

Ｓ組に打ち解けるのもそう時間は掛からないだろう、事実、さっそく談笑を始めていた。

ちなみに英雄は、そんな転入生に興味を示しながらもＨＲが終わると同時にどこかへと去って言った。

当然その背を追うあずみ。

そしてクラスの中心人物である最後の一人、不死川心。

彼女は今なにをしているのかというと。

「そりゃっ」

踊っていた。

いや比喩にあらず。

彼女は現在、談笑の輪の中心にいる百八の目に映るようにわざとらしく袖を振ったり、翻したりしていた。

しかし当の本人は全くの無反応。

何をしていているんだろうと目を向けることはあったが、振られた話題に答えるためにすぐさま視線を切ってしまうのだ。

気になるなら話しかければいいのに。

しかし、自分至上主義の彼女にそんな自分から～、なんて事は難しいだろう。

ただでさえある事に対してイライラしていた彼女は徐々に不満が蓄積し。

「……ぬぅぅぅぅぅぅ～～！」

遂に、貯まっていたフラストレーションが爆発した。

周りの生徒を押し出して、百八の座る机に両手をたたき付ける。

シン、と静まり返るS組の中で、彼女の声は驚くほどよく響いた。

「そなたは此方を馬鹿にしておるのか！？」

「……え？　なんで？」

「分からぬのかこのたわけ！」

転校初日。

彼女とは何も話していないし、何もしていない。

初対面でいきなり怒られ、なんでと聞いたらお前が悪い。

人によってはそれだけで憤慨しそうだが、穏やかな気性の百八は笑ってそれを流し、困ったと首を傾げる。

「君は？」

「……此方は不死川心じゃ」

「そう、不死川さん。始めまして、僕は――」

最高の笑顔と共に言われたその言葉に、彼女は最高に切れた。

理由？

そんなの、彼女以外知る由もない。

「此方は、そなたに決闘を申し込む！」

そうして場面は、いざ決闘の舞台へと移る。

9・・・始業式『心コネクト』？（後書き）

心コネクトが終わったら、次なに見たいか言ってほしいな。

？心コネクトが終わった後の心とのなにか

？まゆっちとのイベント

？さっそく次の攻略キャラへＧＯ

もちろんどれか一つだけしかやらない――というわけでなく、どれが次がいいかだから心配しないで大丈夫。

１０・・・始業式『心コネクト』？（前書き）

今回は大和視点。

次回から面白くなりますよ！

ヘイヘイヘイ！

１０・・・始業式『心コネクト』？

大和は朝のＨＲを終えてから、あらゆる場所に張り巡らせた人脈を活用して、ヨンパチが言っていた白い転入生についての情報を掻き集めた。

しかしかき集めた、と言っても恐ろしい程になにも出てこなかったのだが……

「名前は天憧百八。
住まいは川神学園から数キロ離れた安アパート。
家族構成、出身地、学歴、経歴どれも不明。
そして半年ほど前から早朝に姿を見せる白い麗人……。
ついた渾名が白い恋人」

集めた情報を読み上げる。

恋人って誰のだよ。と心の中で突っ込む。

それ北海道の名菓子じゃないか！

最後の二つの情報提供者はワン子からだ。

早朝ランニングの途中、何度か会ってポカリを奢ってもらっていたらしい。

本当は黙ってないといけなかったらく、言葉途中で自分の手で口を塞いでぐまぐま言っていた。

よし、おりを見て聞きだそう。

結局、大和が自ら調べて得た情報など名前と住所くらいで、誰でも知ろうと思えば知れる程度のものだった。

「私、挨拶してくるわ！」

そして写真を確認し、S組に走りだそうとしたので慌てて止めた。

ワン子がS組に行ったら間違いなく一騒動起こるだろうし。

あちらの人物にも迷惑がかかると言って自制させた。

話を聞く限り危ない奴じゃなさそうだし、問題ないだろうが……

「この不透明さが不気味なんだよな……」

最初は軽く、途中から本気で調べた。

貸しを幾つか消費して、それでも出てきたのは名前と現住所のみ。

ありえない。亡霊かよコイツ。そう本気でそう思った。

半年近くここに住んで情報がそれだけとかありえないだろう。

折り紙をよく買うという情報も出たが、それだけでは到底使った

貸しの分とは釣り合わない。

「大和～、私、もう挨拶しに言ってもいいかしら？」

尻尾を振っている様を幻視するくらいウズウズしているワン子にNOと伝える。

「ダメ。放課後まで待ってなさい」

「ケチ～」

「今行けば英雄と鉢合わせして挨拶所じゃないかもしれないぞ？」

「うぐ。そ、そうね。じゃあ放課後まで待つわ……」

きゅーん。

消沈した様子で尻尾を垂れるワン子。

多少の罪悪感を覚えながらも、この転入生と出会った時の事を思い出す。

あの入学式の日。白くて綺麗な人物だったのは記憶に新しい。

――入学式に修学旅行に行くような量の荷物を持ってくるなんて、相当強烈でまず忘れないし。

「難しい顔してどうしたの大和　？」

「……京か。いやね、軍師としてあの転入生の謎っぷりに驚いているだけだよ」

「大和は私だけ見てればいいのに。結婚しよ？」

「離婚しよう」

「結婚前に離婚した……！？」

消沈する京。しかしそんな軽口のおかげで幾分気分が軽くなった。

「やれやれ、なんか情報が掴めそうな事でも起こればいいんだけど」

そんな呟きが叶うのは、すぐ後だった。

『全校生徒の皆さんにお知らせです。只今より第一体育館で決闘が行われます。

対戦者は２－Ｓ所属と、不死川心。同じく２－Ｓ所属の転入生、天憧百八。

内容は武器を使用しない直接戦闘。見学希望者はグランドに集合しましょう。

繰り返します……』

「――は？」

「俺の苦労って一体……」

噂の転入生とあの不死川心の一騎打ちだ。

あの不死川が勝っても負けても実力と言う大きな情報を得られる。

降って湧いたネタに、けれど大和は落ち込んでいた。

「大和も馬鹿だよな。滅茶苦茶話題になってたぞ」

「くそ、今回ばかりは言い返せない。岳人のくせに」

「岳人のくせにってなんだよ！」

そう、大和が貸しを消費してまで探した情報は、足元に転がっていたのだ。

足元……一年生のところに。

灯台もと暗しとはこの事か。

外郭ばかり漁っていて、肝心の内堀を疎かにしていた。

なんという失態、なんという凡ミス。

軍師の肩書きを預かる彼にとって、このミスは思っていた以上にきつかった。

しかしまぁ、と区切りをつけて改めて一年達のところに目を向ける。

普通、一年生は決闘の儀を理解していない者が多く、４月5月は静かなのが通例だったのだが、今年の一年はそんな事しったことか！　と言わんばかりに、熱狂度合が凄まじかった。

なんでもあの転入生、入学式の時に川神院の師範代とデモンストレーションとしてヤり合ったらしい。

あの美貌に和装と目立つ容姿だ。

ワン子から聞いた話じゃ人格も出来ているみたいだし、更に実力もある。

となればファンが出来てもおかしくないし、実際出来ていた。

見ればほら、横断幕とか作られているし。

『フ　ァ　イ　ト！　（＾――）ー☆　天　憧　百　八』

あの真ん中の顔文字がさりげなくウザったい。

というか入学式から始業式までの短い期間で横断幕など作れるのかと、今年の一年に大和はさりげなく戦慄した。

「しっかしそんなに実力あんのかねぇ」

岳人が若干不機嫌そうに呟く。

基本年上にしか興味がない男だが、流石にポッと出の転入生がそんな声援を送られるのはそれなりに不愉快らしい。

「あはは。でもさ、やっぱり性別が分かり辛いよね、あの人」

「そうだな。俺様の目から見てもパッと見女にしか見えねぇし」

「あぁそれは――」

「男だろ」

と、大和が答える前に回答を提示された。凛として、確かな力がある声に振り向く。

「姉さん」

最強の二文字を欲しいままにする川神学園最強の女性が嬉しそうに笑っていた。

「歩き方、筋肉の付き方からして男だよ。しかしなんだ、あの時会った少女がまさか男だったとはな～」

「知ってるのか姉さん」

「随分と前に一度だけな。あれは冬の寒～い早朝でなぁ、変な男連中に攫われそうな所を助けて介抱してやろうとしたら逃げられちゃったんだよ」

「それ、モモ先輩が男連中と同じに見られたんじゃ痛い痛い痛いッ！」

「失礼な事を言うのはこの口か？　この口か？　ん～」

「モモ先輩。それ以上やると岳人の頭がトマトになるから」

「そうだな。あのときは驚いたぞー。いきなり三角飛びしてどっか行っちゃったんだよ。あれは中々のもんだったなぁ」

「……お姉様。それってもしかして、あの冬の早朝に一緒に出た時の事？」

「お、妹は覚えているのか～。そうだぞ、お姉さんが助けてあげようとしたら逃げたんだよ。さてさて、あの時逃したのはウサギか狼か……」

そんな物騒な事を呟きながら、武人の面を押し出して笑っている。

「それにあの名前、百八だっけ？　私と似た名前のくせに色は丸っきり正反対なんだな。普通あそこまで白で通すか？　あはははは！」

「姉さんも黒系ばっかだよね」

「私はいいんだよ、ダークブラウンとかクールブラックとか、黒にも色々種類があるんだぞ。でもあいつ真っ白じゃないか。白い恋人とかあはははは！」

どうやら通り名がツボに入ったらしい。

しかし、姉さんから逃げるって相当のモノをもっているんだろう。

「もう少し、情報集めてみるか……」

あらためて転入生の不可思議っぷりを再確認して。

１０・・・始業式『心コネクト』？（後書き）

風間ファミリーの百八に対する反応。

大和、全く情報が出てこない転入生を警戒しています。

岳人、転入生がモテてて少し気に入らない。

モロ、特に思うところなし。たまに見惚れるが。

京、当然のことながら興味なし

一子、知り合いでした。会いたいみたいですがストップかけられた。

百代、冬に出会ったのは覚えていたようです。
　魅せる力によって興味度が変わります

ちなみにキャップは現在行方不明。始業式すっぽかしてどっか行ってますあの自由人。

近況報告&ヒロイン好感度パラメーター（前書き）

この項目は作者のこの作品に対するなんらかのコメントを書きこむ場所であり、

現状のヒロイン達の好感度を気ままに更新する章です。
なので基本、全部読んでから読むようにしましょう。
章が進むごとに更新されます。
なお、本編で明かされていない部分の項目は？で隠します。

近況報告&ヒロイン好感度パラメーター

■近況報告

本編じゃなくてごめん。
好感度メーターに登録されているヒロインは、話の焦点が当てられない限り登録されません。
現時点で出会っていても、その話が乗らないと更新されないのです。

■好感度メーター

システム説明。

感想欄で書かれた内容のイベントがランダムイベントとして発生すること有り。
もちろんここに載っていないキャラでもあり。男だろうと超脇役だろうとＯＫ

もしそのイベントを参考にして作る場合は
その感想を書いてくれた人の名前を前書きで記載させて頂きます。
時系列は少しおかしくなる事もあるかもしれませんが、まぁ外伝扱いで。本編に絡むかもしれないが。

それによってメーターが下がる事もあれば、上がることもある。
場合によってはヒロイン枠から消えることあります。

０〜１――敵・嫌い
２〜３――気になる相手（人として）・友達
４〜５――親友・気になる相手（異性として）
６〜７――好き・惚れた
８〜９――愛している・京レベル（隙あらば告白してきます）
１０――――狂化した京レベル（隙あらば襲い掛かってきます）
１１〜――スクールデ〇ズ化（一人占めされます。ヨットの上でギュッとね）

■現在登録されているヒロイン

１・川神百代（百八の呼び方：百姉ぇ）
０■■□□□□□□１０
「あの白いのが男だったとはな〜。見た目は……うん、中々私好みだ」
備考：とりあえず面と向かって話しましょう

２・川神一子（百八の呼び方：？？）
０■■■□□□□□□１０
「はやく挨拶したいわー」
備考：とりあえず会いましょう

３・黛由紀江（百八の呼び方：由紀江）
０■■■□□□□□□×１０
「まゆっちがご飯作ってくれるかもしれないぜー。重箱五段重ねパネェ〜　」
備考：まだ自分の気持ちに気付いていないのでしょう

４・不死川心（百八の呼び方：？？？）
０？？？？？？？？？１０

「　」

備考：まだ書かれていないのでしょう

近況報告&ヒロイン好感度パラメーター（後書き）

ヒロインの最終的な数は決まっていますが、それもネタバレ要素を含んでいるので書きません。
かもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6249y/

真剣で私に願いなさい - 八百万の想い -

2011年11月23日22時45分発行